

500
26

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



36.12.25

21004

500-26



歌舞伎脚本傑作集

坪内逍遙
渥美清太郎 共編

袖簿播州廻
忠臣公は早七訓

第七卷
七五







文學博士

坪内逍遙

渥美清太郎

共編

第七卷

歌舞伎脚本傑作集

大正
11. 7 7
内交

東京春陽堂發行

目次

緒言.....

「袖簿播州廻」解題.....

同本文..... 一頁—三四頁

奈河七五三助小傳.....

「忠臣伊呂波四十七訓」解題.....

同本文..... 三四頁—四二八頁

目次

緒言……………

「袖簿播州廻」解題……………

同本文……………一頁—三四頁

奈河七五三助小傳……………

「忠臣伊呂波四十七訓」解題……………

同本文……………三四頁—四八頁

挿畫目次

- 嵐灘助の藤原時平似顔繪(色摺り木版。三世歌川豊國筆「似顔畫大全」所載)卷頭
初代中村富士郎の道成寺白拍子似顔繪(色摺り木版。同書より)……三七頁の前
「いろは假名四十七訓」繪番附表紙……………二四三頁の前
「高田馬場仇討」錦繪(三世歌川豊國筆。コロタイプ版)……………三四九頁の前
「いろは假名四十七訓」序幕より四つ目まで……………三五二頁の前
「彌作鎌腹」錦繪(三世歌川豊國筆。コロタイプ版)……………三七七頁の前
「いろは假名四十七訓」八つ目より大詰まで……………三九五頁の前

緒言

本卷に關しては特に讀者諸君に陳謝しなければならぬことがある。それは「袖簿播州廻」が極めて珍らしい臺帳であるために、此作の舞臺面を示すに足る役者錦繪の適當なるものをどうしても手に入れることが出来なかつたことです。で、止むを得ず、「似顔繪大全」中のものを一二複製して、辛うじて口繪だけを間に合せたのですが、前々の卷のに比して不釣合となつたのを免れない。随つて本卷は、挿繪の數に於いて、やゝ不足した氣味となつたが、それは後々の卷に於て埋め合はせることにしますから、どうか御不諒下さい。

實は、印刷所の都合其他で、第七、第八、第九の三卷は、すべて昨年中に印刷済になるべき筈のものなの、豫期以上に延引したため、編輯者の一人たる私は、例によつて昨年末から本年四月まで伊豆の熱海へ引き籠ることとなり、加ふるに一二ヶ月前より腦を病みましたので、本年に入り、俄かに第七、第八、第九と三卷一度に印刷される段となつては、辛うじて校正に携はり得たぐらゐることとして、其他は何もかも、七五助と龜助の傳の起稿をも渥美氏に頼んでしまつたやうなわけで、同氏とても非常に忙しく、それこれ、つい斯様な不備を醸した次第と御諒恕下さい。

大正十一年五月二十日

道 遙

袖たもと
簾しだ
藩はん
州しゅう
廻めぐり

〔袖簿播州廻〕は、

安永八年三月の大阪角座へ書きおろされた狂言で、作者は初代並木五瓶です。五瓶は此年、まだ三十三歳で、作者としては、まだ若過ぎる位りの年齢でありましたが、既に前年までに「時平の七笑ひ」、「樓門の五右衛門」、「木津勘助」等の作を発表して、異常な好評を得てゐたので、興行師にも、俳優にも、また観客にも、可なり期待されてをり、いはゞ、賣出し盛りてした。殊に、當時は、嵐雛助に書きおろした狂言が最も喝采を博してゐたところから、此時も、雛助の柄を見て、姫ヶ城の傳説を材料として、佻姦な家老と、誠忠な若侍ひとの二役を兼ねさせましたが、其畫策が圖に當り、此芝居は非常な大入りを占めました。就中、雛助の印南内膳の佻姦振りが好評で、彼の「眠獅選」にも、彼れの當り役中に數へ、上上吉の部に入れてあります。

大切に初代中村富十郎の道成寺の所作事があります。これは、勿論、此時が初演ではなく、富十郎としても、其八回目に當つてゐます。が、此際、五瓶は特に富十郎の爲に、「加古川宿屋の場」を書き足して、「道成寺」と筋を連絡させたといふ特殊の興味があり、二つには、當時、大阪での所作事の臺本は珍らしいのですから、収録しておきました。

といふ次第で此狂言は、頗る好評であつたのでしたが、再演はされませんでした。只「姫ヶ城の

場」一幕だけは、後年五瓶が二度目の江戸下りの時、「ときにあうしうつばのしほふか當奥州臺碑」といふ顔見世狂言の中へ、役名を變へただけて、そつくり其儘に使ひました。役割りは、左の通りでした。

古佐壁主水、印南内膳、與九郎狐の三役を嵐雛助。近藤平次兵衛、牛窓十内、たばこ屋小市、道成寺の住職の四役を嵐三十郎。加古川三平、道成寺の所化の二役を藤川八藏。生田兵庫介、久住新平の二役を尾上新七。桃の井陸次郎、弓矢太郎、道成寺の所化の三役を小川吉太郎。娘お辰、小女郎狐の二役を花桐豊松。桃の井八重菊丸の一役を藤川山吾。内膳妹幾世の一役を片岡松次郎。傾城尾上、腰元龍野の二役を芳澤いろは。母おくま、奴うだ平の二役を嵐他人。碓の前、娘お光、白拍子實はお光の亡霊の三役を中村富士郎。

本巻の底本としたのは、帝國圖書館所蔵の三冊本でしたが、これには道成寺の所作事が缺けてゐます。ところが、幸ひにも、其時の道成寺一幕だけの臺本を、わたくしが最近手に入れたので、完備したわけです。参考とすべき他の臺本は見當りませんでした。

渥美清太郎 識

(2)

姫館妖怪 袖簿 播州廻

序 幕

曾根天神の場
桃の井館の場

登場人物 印南内膳。古佐壁主水。久住新平。生田兵庫之介。印南弟、大藏。高岡源吾。平次兵衛娘、お辰。桃の井八重菊丸。傾城、尾上。内膳妹、幾代。腰元、須磨。傾城、陸花。金子屋才兵衛。桃の井陸次郎。加古川三平。母、おくま。鹿間大學。近藤平次兵衛。桃の井修理太夫。片野軍内。大島兵治。傾城、此浦。小姓、求馬。同、數馬。禿、も、野。同、そで彌。腰元、なでしこ。奴、一人。家來、大勢。上下侍ひ、大勢。

造り物、黒幕。見附け、大木の松の木。釣り枝見事に、上の方、築地、見越しに櫻花。すべて播州曾根の天神の模様。此前に床几二脚、毛氈敷きあり。庭神樂にて幕あく。
ト向うより内膳妹、幾代、屋敷風の娘にて、須磨、なでしこ、腰元にて、奴一人連れ、出てくる。

袖簿 播州廻

(1)

須磨 申し、御料人様。もそつとお静かにおひろひなされませいなア。

なで ほんにモウ、御料人様は、滅多無性にお急ぎなさる、故、私しとていっきせき追ッ附きかねまする。
須磨 殊に、今日は、此會根の天神様へ御参詣。そのやうにお急ぎなされずとも、マア、櫻でも御覽じた
がようござりますわいなア。

奴 左様でござりまする。私しも今日御料人様の、此天神様へのお供、ヤレ、嬉しや、何でも道で上
爛ても、濁りても、見附け次第引ッ懸けうと思ひの外、何の事はない、飛脚のお供するやうに、
がつくりと草臥れた。

須磨 私しはとんと合點が参りませぬ。御料人様、書寫のお山へ御参詣ならば、其やうにお急ぎなさる
る筈ぢやが、此會根の天神様へ、どうしてお心がせきますえ。

幾代 サイノ、おすま、そなたは様子を知つてゐるやうによつて、苦しうないが、わしが此やうに急いで
天神様へ御参詣申すは、ソレ、今のぢやわいの。

須磨 今のは、何でござりますえ。

幾代 ソレ、今そなたのいやつた書寫のお山の

須磨 エ、そんなら八重菊丸様が、此天神様へ御参詣なされますかえ。

幾代 それで今日は、兄様にお断り申して、此天神様へ参詣したのぢやわいなう。

須磨 さては八重菊丸様は、おざ、の霰、落つるといふ色よい返事が参りましたかえ。

幾代 イヤ、其返事が無いによつてぢやわいなう。

須磨 何の事でござりますぞいなア。

幾代 いつぞや、書寫のお山にお開帳の折から、参詣して、ちよつと見そめたお小姓の八重菊様、それ
からわしが心のたけ、書いて送つた玉章は、千束に餘れど、いなやの返事が無いによつて、それ
に様子を聞けば、今日此天神様へ御参詣と聞いたによつて、急いで参つたも、どうぞ八重菊様に
直にお目に懸かつて、御返事を聞かうと思つて。

須磨 そんならお急ぎは御尤もでござります。誰れござらう、此國の御家老、印南内膳様のお妹御、幾
代様、私も(?)領分權威を以ていうたら、あつちは書寫のお小姓、めつたにいやとは仰しやる
まい。

なで そんなら、御料人様は、書寫の御小姓八重菊様に惚れてござる。オ、をかし。

須磨 コレ、必ずそんな事を二人ともに、お屋敷で噂ばししよまいぞ。合點か。なでしこの。角
助どの。

奴 ネイ／＼、合點でござります。お屋敷でお旦那が幾代様の事をお尋ねなされたら、書寫山の左少將、こゝん小米の、小なまかみ／＼。(とをかしういふ。)

なぞ何をいはしやんすぞいなう。

須磨 イヤ、申し、御料人様。そんなら八重菊丸様も、追ツつけ御參詣でござりませう。お逢ひなされたら、きつと御返事をお聞きなされませえ。

幾世 サア、わしもさう思つてゐれど、胸が、どき／＼して、お目に懸つたら、思ふやうには言ひにくからうぞいなう。

須磨 ハテ、お心の弱い。そんな事では埒が明かぬ。私しもお側に附いてゐて、共々申しませうわいなア。

幾世 どうぞ、そなたも、さうしてたもいなう。

須磨 そんならマア、神前へお参りなされ、神主方でお待ちなされませいなア。

奴 それ／＼。早う神主方へお入りなされませい。私しも、お神酒なりと戴きませう。

皆々 申し、御料人様。

幾世 そんなら、皆の衆。

皆々 先つお越しあられませう。

ト幾世皆々臍病口へ入る。囃物入りの面白き三味線はなり、向うより

皆々 返した／＼。うそをば返した。

30
12/15

ト此囃子にて尾上、陸花、此浦、傾城にて、桃の井陸次郎若殿にて、高岡源吾、印南弟大藏、片野軍内、大島兵治家中の侍ひ、いづれも衣裳、羽織。金子屋才兵衛、亭主にて、禿禿らず、笹に短冊を附けて持つて出て、之を持たぬは桃の井陸次郎、印南弟大藏ばかり。あとより上下の侍ひ、釣り臺へ銚子、盃提げ重、菓子盆、紙、硯、銀の風呂、金の茶碗、いづれも高蒔繪、随分結構にして荷なひ出る。あとより供廻り大勢、皆本舞臺へ来て

皆々 返した／＼。うそを返した。

才兵衛 サア、やう／＼曾根の天神様。是から神前へいて、互ひに「うそ」を取替へる神事、皆囃したり／＼大藏 待て／＼、才兵衛。高岡源吾殿や兩人の衆は様子を知つてゐて、若殿と身共は、才兵衛が何やら面白い趣向が有る、お供せいというたによつて、此やうに面白う浮かれて来たが、見れば、めいめい笹の葉に短冊を附けて、「うそを返した／＼」とは、ありやマア、何の事ぢや。

才兵衛 ハ、ハ、ハ。さすがのお大藏様も、さては此天神をば御存じござりませぬか。

大藏 イヤ、身共よりは若殿が御不審に思し召す。ちやつと早う様子を申し上げい。

才兵 左様ならば、語つてお聞かせ申しませう。先づ、此うそ返しの神事と申すは、都島原の廓で、毎年正月十五日の夜、太夫、天神、引き舟、やりて、禿、花車、仲居、凡そ廓中の男女、此やうに色紙、短冊をつけて、島原の内方さいあい天神とも、又幸ひ天神とも申し、神前へ集つて「うそ」を返すというて、互に「うそ返し」の神事とて有り。それをかたどつて常國、室の君達を連れて、此會根の天神様へ参り、互ひに取り替へる色紙、短冊、「うそ返し」の神事のいはれ、あらく斯くの通りでござりまする。

大藏 若殿、お聞きなされましたか。(ト陸次郎、ウソくとうなづく。)

源吾 大藏殿、拙者も才兵衛指圖にて、此やうに短冊を附けて参るのは、

軍内 何卒若殿様の御機嫌にて、御遊興有るやうにと存じ、

兵治 返したく、うそを返したと申して参りました。

尾上 ほんに、わたしらも耻かしい。殿様と一しよに此天神様へ参るが嬉しさに、皆様と一しよに來ましてござんすわいなア。

大藏 イヤ、室の廓で全盛の尾上殿、誰れあらう此國の主、桃の井修理太夫様の若殿、陸次郎様におも

はるるとは、きついお仕合せ。

尾上 若殿様のお情けの嬉しさ、推量して下さいませ。しかし、廓の惣路には、言ひ交した殿御の心を引いて見ようと、ちよつと外の揚屋へ借られて、座敷ばかりのさ、事に、心ばかりは飛び立つやうに思つても、わざと遅うもたせかけて行て見れば、隙が入つた、遅いのと、それが口舌の發端。ひぞつて見せたり、叩いたり、退くの、退かぬの負けおしみ、花車様頼んで中直りの手管。それが勤めの樂みと、傍觀さんの話しは聞けど、皆様の言ひ附けて、殿様に腹立てさせます事がならぬので、口舌も、ひぞる事もならぬのが、ほんに辛氣でならぬわいなア。

陸花 そりや尤もでござんす。わたしらへもきつい言ひ附けて、御機嫌損ふ事はならぬわいなア。

ト此うち陸次郎こなしあり。

陸次 イ、ヤ、タ、太夫、ク、廓の意久地、ク、口舌せう。オツおもしろい。ダダ大事な。コ、今夜口舌せう。

ト始終吃つていふ。

大藏 イヤ、若殿、それは御無用になされ。あなた様には、生れつき、言舌もとほらぬゆゑ、兄内膳殿の言ひ附け、それで廓の御遊興も、随分仰せの通りに仕り、お腹を立てさせぬやうにと、ナ

ウ源吾殿。

源吾 左様でござる。若殿様をお諫め申す爲、家老内膳殿の言ひ附け。それで、われ／＼も廊のお供。若殿の御前にて、色々のほたえも、憚りにも存じませすいたすも、是れ即ち御奉公。

軍内 御家老内膳様の言ひ附けて廊のほたえも、大分今日迄で五十日程の居つゞけ。堅いお屋敷と違ひ、毎晩々々の樂み、何と、有り難い事ではござらぬか。

兵治 有り難いやら、忝いやら、餘りの事で冥加恐ろしう存じまする。

才兵 イヤモ、わけて有り難いは私してござります。何ぼう懸りまして、雜用、揚げ代は内膳様から遣はされます。太夫はどうに身請けは濟んで、年季證文は内膳様へお渡し申してあれど、屋敷へ呼び寄せては、若殿様が窮屈に思し召したらわるいとあつて、やはり廊の遊び。金銀の掴み取りとは、此時でござりまする。

軍内 廊の亭主がほしがらぬは、神武以來ない事ではござる。

大藏 それと申すも兄内膳殿の計らひ、有り難いと思へ。

才兵 エ、有り難い事ではござります。

陸次 ダ、大藏。ソ、そんなら、オ、おれも、タ、太夫と、クク口舌はならぬか。

大藏 イヤ、御無用になされませう。ナウ、何れも。

源吾 左様でござりまする、もうよしになされませう。

陸次 セ、折角、タ、楽しんで、キ、ゐたものを、ナウ、太夫。

尾上 イエ／＼、皆様のお心遣ひ、もう、よしになさんせいなア。

陸治 ムウ／＼。(トウなづく。)

才兵 時に、此曉返しの神事に、見れば、若殿様と大藏様の短冊がない。早う、お書きなされて、お取り替へなされい。

大藏 いかにも。若殿と一しよに附けて取り替へう。マア、短冊へは何を書くのぢや。

才兵 イヤ、古歌でも、詩でも、或ひは發句でも、出たらめに書いて下げ、めい／＼の名ばかり書いてすいた者と取り替へたがようござります。

尾上 申し、大藏様。私しは殿様と取り替へうと思つて……「鳥もなく、鐘も聞こえぬ里もがな、二人ぬる夜の隠れ家にせん。」とかはゆらしい此古歌を書き附けましたわいなア。

子供 太夫様は、きつい殿様をお思ひ込みやうちやわいなア。

陸花 私しは又、誰れを戀ふとの主も定らねば……「散り散らず聞かまほしきを古郷の、花見て歸

る人も逢はなん。」此歌を書き附けましたわいなア。

此浦 私しは新造なれば「知るも知らぬも逢坂の關。」蟬丸様の歌ぢやわいなア。

子供 わたしらは汐千ぢやわいなア。

才兵 汐千とは、しめめ、始てござりまする。

源吾 拙者は明石を支配いたすゆゑ、人丸の歌。

大藏 常から物堅い源吾殿、女は嫌ひぢやによつて、

源吾 中々ぢやない、「長々し夜をひとりかも寝ん。」

大藏 シテ、軍内、兵治も附け召されたか。

軍内 拙者常から不調法者ゆゑ、附ける事も一向出来ませぬ。併しながら、大分あぢやりました。お聞きなされて下さりませ。……：「逢ふ事は猶かた糸の夜よとなく、晝は消えつゝ、あたまかくやま。」なんと、どうてござりまする。

源吾 ありや、道行きやら歌やら、譯が知れぬ。

軍内 私しがえらう譯つて案じました。

子供 おまへ物案じさすと、首が真直ぐになるぞえ。

軍内 そりや、なぜに。

子供 ハテ、常から首をかたげてぢやさかいに。

軍内 何をぬかす。シテ、兵治殿はどうぢや。

兵治 拙者は又格別、あの此浦太夫に執心てござるゆゑ、どうぞきやつと取り替へうと思つて、新物を致しました。お聞きなされい。……：「此浦のお敵をしめて取つて伏せ、持った刀でさし通すとは。」不調法。

軍内 中々出来ました。

陸次 タ、太夫、大藏、リョ〜料紙持て。

大藏 ハツ。(ト大藏、料紙、硯持つて行く。陸次郎さら〜と書く。)

陸次 ゲ、源吾、コ、これを見い。

源吾 ハツ。(ト取つて)

「花と見つ、傾城共が立ち姿。」……：これは御發句をば遊ばされましたな。

陸次 ド、〜、どうぢや〜。

源吾 中々面白い儀てござりまする。

幾代 さいなう。今日は此天神様へ御参詣遊ばす筈。今にお越しなされぬ故それが氣にかゝるわいなう
須磨 申し、御料人様、あれへお越し遊ばすは、八重菊丸様ぢやござりませぬか。

幾代 ほんに、さうぢやわいなう。

須磨 申し、こゝへお越し遊ばしたら、必ず〜。

幾代 そりや合點ぢやわいなう。

ト唄になり、桃井八重菊丸、若衆の形、袴、羽織にて、奴一人連れ出てくる。

奴 申し、八重菊丸様、私は御参詣の様子を、神主方へ案内仕りませう。

八重 成る程、大切な方丈様のお使ひ、其通り申しあげい。

奴 ネイ、畏りました。

ト奴臆病口へ入る。八重菊丸こなしあつて、櫻を見たり、松を詠めたりするうち、須磨、幾代にちやつ
と側へ行つて言へといふ。幾代恥かしき事色々、扇にて顔をかくし、八重菊丸の側へ寄る。八重菊丸は
合點のゆかぬこなしにてよける。須磨向うへ立つて邪覓する事宜しくある。八重菊丸振り切つて行かう
とする。須磨引き留めて幾代にをしへる。幾代物いはず、八重菊丸の袖を控へる。

八重 これは、最前から、わしが行く道の邪魔になる女中様。何ぞ御用が御座りますかえ。

幾代 アイ、御用はたんとござりますわいなア。(ト扇を取る。顔見合せ)

八重 ヤア、こなたは、

幾代 八重菊丸様。お馴染でござりますわいなア。

八重 幾代どの、今日は方丈様の大事のお使ひ、此會根の神主方へ参らねばなりませぬ。

ト振り切り、行かうとする。須磨向うへ立ち塞がり

須磨 お待ちなされませ、八重菊丸様。減多にやります事はなりませぬ。

八重 こなたは幾代どの、お腰元。

須磨 ハイ、須磨でござります。手前の御料人幾代様が、あなたをお山で見そめなされてから、心のた
けを玉章でお知らせなされても、何の御返事もないゆゑ、幾代様のお案じ。けふお目にかゝるは
幸ひ。どうぞ色よい御返事をなされませぬうちは、私しがめつたに通しませぬ。

幾代 「捨つる身の苦の衣は只一重、重ねはうすし二人寝んとは」と、僧正遍昭様の顔もあれば、たとへ御
出家におなりなさるゝあなたでも、わたしが戀ひを叶へて下さりませ。佛様も呵つてはござりま
すまい。お前様に添ひたいゆゑ、わたしも一しよに坊様になつて、後生とやらを願ひますわいなア。

八重 「くらきよりくらき道にぞ入りぬべき、遙かに照らせ山の端の月」と、門の戸を閉ぢて逢ひ給はぬと

やら。幾代殿、どのやうに仰しやつても、此戀ひはどうも叶へられませぬ。

幾代 そんなら、どのやうに申しても。

須磨 申し、八重菊丸様。御料人様の

八重 サア、志しは嬉しいけれど、堪忍して、思ひ切つて下されいなう。

幾代 ハア、。(ト泣く。)

ト此時、高岡源吾、最前の笹を持って出かけぬて

源吾 若殿様、御健勝にお渡り遊ばされますか。

八重 そちや高岡源吾。

幾代 ほんに源吾様。

源吾 こなたは内膳殿の妹御、幾代どの。

八重 すりや、幾代殿は、家來内膳が妹か。

源吾 左様でございます。

幾代 申し、源吾様。合點がてんが参りませぬ。八重菊丸様を若殿様とわえ。

源吾 御存じござるまい。八重菊丸様は、則ち大殿修理太夫様の御妾腹の若君なれど、御出家のお望み

あつて、幼い時より書寫のお寺へ、御登山なされましたのでござります。

幾代 そんなら若君陸次郎様とは

源吾 お腹替りの御兄弟でござる。

幾代 左様ならば、矢ッ張りわたしの爲にはお主様しゆさま。さうとは存じませず(トこなしあり)お免されて下さりませ。

八重 わしが身の上を知らねばその筈。少ちよさい時から出家の望みゆゑ、わざと父上のお名を隠してゐたわいなう。

須磨 申し、御料人様。こりや、ひよんな物になりましたわいな。

源吾 イヤ、幾代殿、氣遣ひなされな。最前から様子は聞いた。若殿様へ御執心。切なる志しを推量して、取り持ち申さう。

八重 コレ、源吾、わしは最前からいふ通り、出家の望みなれば。

源吾 サア、御出家のお望み有るゆゑ、お取り持ち申します。幾代殿が戀ひが叶はぬ時は死ぬるとある。是れ手をおろし給はねども、若君ゆゑ。すりや、殺生と申すもの。五戒の内でも第一のいましめてござれば、枕はかはずとも、お盃なりともして満足まんぷですが、煩惱即菩提とやらちやござり

ませぬか。

八重 まことに幾代が志し、それで済む事なら、盃をしませうわいなう。

源吾 何と、あれ聞かれしか幾代殿。どうでござる。

幾代 エ、有り難うござります。若殿様とも知らず、思ひ込んだ私し、盃なりとも、戴きますれば、嬉しうござりますわいなア。

須磨 これと申しまするも、源吾様のお世話。氣は急けど、ちやつとお盃を。といつてもこゝは途中。神主方へ。イヤ、神主方では人目有り。ぢやというて、銚子もなく、何とした物であらう。

ト八重菊、こなしあり、源吾が持つてゐる笹の葉を取り、

八重 コレ、源吾、都ては酒を愛して、竹葉とも、笹とも唱ふるとあれば、これにて。

源吾 さすがはお國のお胤。あつばれ御發明。(ト扇をひるげ)其さゝにもとづき、此扇の月の繪をかう取り直せば、取りも直さず盃。假りの妹背の御祝言。イヤ、召し上がられませう。

ト扇を渡し、笹を取る、幾代嬉しきこなし。八重菊丸受けて、源吾注ぐまねする。

幾代どの。イヤ。

トさす。須磨、幾代へ扇をやる。幾代驚く、須磨注ぐまねして盃事納まる。

須磨 御料人様、日頃の思ひが叶ひ、お嬉しうござりませうなア。

幾代 源吾様、段々のお志し、忝うござります。(ト臆病口より大藏出て)

大藏 源吾殿。是にござるか。若殿の、お召してござる。

源吾 大藏どの。すりや、拙者を若殿のお召してござるか。

大藏 左様でござります。(ト八重菊丸を見て)あなたは若君、八重菊丸様。

八重 大藏、兄内膳も變はる事もないか。

大藏 ハア、。

幾代 巾し、兄様、お前もこゝへお越しなされましたかいなア。

大藏 そちや妹幾代。腰元の須磨、此ところへ何用あつて参つた。

幾代 アイ、私しはアノ、八重菊丸様に(トいはうとする。)

須磨 ア、イヤ、御料人様は、何やら願望あつて、此天神様へ御参詣なされてござりますわいな。

ト八重菊丸こなしあつて、

八重 源吾。大藏。すりや、此天神宮へ、兄上陸次川様も御参詣なされたか。

源吾 ハツ、若殿の御参詣ゆゑ、我々も御供。即ち若殿は神主方にお入り有れば、若君にも神主方へ、

お入りあつて、若殿と御對面。

八重 成る程。さうしませうわいの。

大藏 妹、其方も參詣が濟んだら、早く屋敷へ歸れ。

幾代 イエ、わたしはまだ。

大藏 此所に用事が有るか。

幾代 サア。イ、エ。

大藏 然らば、早く歸れ。須磨。妹の供いたせ。

須磨 ハイ、畏りました。(ト臍病口より、なごしこ出て)

なご サア、御料人様。もうお歸りなされませぬか。

幾代 エ、何ぢややら、人の心も知らず。

源吾 サア、若君様。

八重 神主方にて、兄上様にお目にか、らう。源吾。案内。

源吾 ハツ。

幾代 ア、申し。(ト行かうとして、大藏に行き當たる。)

大藏 妹、そちも早く歸らぬか。

幾代 サア歸りますわいなア。(ト八重菊丸の方へ、いろくこなし。)

八重 大藏。後に。

大藏 ハア。

ト唄になり、八重菊丸、源吾を連れ臍病口へ、幾代見惚れてゐるを、須磨、なごしこ、しがとくあつて、無理に向うへ連れて入る。あとに大藏殘る。所へ橋懸りより鹿間大學出て

大學 大藏、いよく陸次郎は此ところへ參つたか。

大藏 これは鹿間大學殿。

大學 大藏。かねて其方と對談致した通り、彼の儀に就いて、大學これまで參つた。

大藏 成る程。かねてこなた様と申し合した通り、首尾よくゆけば拙者が仕合せ。

大學 某もかねて桃の井の家を望むは、同じ國を領しながら、修理太夫が支配を請ける身は郡代同然。其奇怪。それゆゑ、そちと云ひ合せた通り。

大藏 先達て御内意有つた東山殿よりの仰せ。即ちあなたは

大學 上使なれども、相役は生田兵庫之介。きやつ隣國の好みといひ、修理太夫とは家門なれば、こち

らの手段が

大藏 お氣遣ひなされますな。若君陸次郎殿をしくじらすは、先達て、お手に入つた、彼のしの、めの香爐、
大學 番人並びに藏人を手に掛け、奪ひ取つた此香爐。是が一つの越度なれど、まだ外に何ぞ、科を拵
へる工夫が有りさうなもの。

大藏 ムウ。(ト大藏思案して、最前陸次郎が書いた短冊を出し。) 大學様。若殿の自筆の發句。是が何ぞに成
りますまいかな。

大學 ムウ。「花と見つ傾城どもが立ち姿。」ムウ、陸次郎が名頭。よし。大藏、悦べ。大方是て方附
いた。

大藏 シテ、又、お役目のお上使、屋敷へお入りは。

大學 相役兵庫之介が着次第。……大藏、そらが心を、かねて見抜きしゆゑ、奪ひ取つたるしの、めの
香爐を預け置く。随分大切に。萬事の儀は又とくと。(ト香爐を渡す。大藏取つて)

大藏 ハツ。此上は香爐を預かり、あなたのお望み、おツつけ叶へまうせ。

大學 其時は家柄といひ、其方も立身出世。

大藏 只それのみを願ひまする。

大學 しがらば、身共は立歸り、

大藏 何かの手つがひ、

大學 ひそかに熟談、

大藏 大學様。

大學 大藏、さらば。

ト唄になり、兩人こなし有つて大學は花道、大藏は臆病口へ入る。ト在郷唄になり、向うより近藤

平次兵衛、浪人親仁にて、懐ろに子を抱き、娘お辰、世話着流しにて、連れ立ち出て

お辰 申し、と、様。もうこ、が會根の天神様でござんすわいなア。

平次 ほんになア。孫を愛して歩くので、つい來たわいの。

お辰 お年寄りに、其坊ちは。私しが代つて抱きませうわいなア。

平次 イヤ、大事の可愛い孫を抱いてゐれば、懐ろて、はや、笑ひをるが祖父の樂しみ、めつ
たにわが身には抱かさぬ。時に、お辰、折角わがみの願ひゆゑ、在所からこ、まで來て、屋敷へ
行つたのに、彼の人ををられて残念な。

お辰 サイナア、折角來たのに他行とやら。どうぞ晩方に行て、待ち合はして、どうぞ頼んで下さんせ

いなア。

平次 ハテ、娘のわが身の願ひ、おれが如才があらうか。よい序でぢやによつて、此坊主めが顔も、妹に見せてやらうと思つて、室の扉へ行つたところか、是も内にはゐる。

お辰 サア、様子を聞けば、此會根の天神様へ参つてゐるやうにござんす。妹は廊下名高い尾上といふ太夫、人に尋ねたら、つい知れませうぞいなア。

平次 サア、どうぞ妹に早う逢ひたいものぢやが。(ト此うち尾上、臆病口より出て来て、兩人を見て)

尾上 ヤア、お前はと、様。姉様ぢやござんせぬかいなア。

お辰 ヤア、そなたは妹。

平次 ほんに娘のおみき。コリヤ、われに逢はさうと思つて、孫を抱いて来た。サア、ちやつと、顔を見い。

尾上 ほんに、わたしも此間は、坊の便りを聞きませぬゆゑ、案じてをりましたが、と、様、よう連れて来て下さんなア。

お辰 サイナウ。そなたも知つてゐる通り、と、様が屋敷に勤めてゐるやんした時、親々の言ひつけじて下さんなした夫、古佐壁主水様にお目にか、つて。

平次 サア、姉の此お辰を呼び取つて貰はうと思つて、相談に行たれば、主水は他行。ア、今思ひ廻せば、以前の近藤平次兵衛と違つて、土百姓のおれ。なんぼう以前の言ひ號けぢやとて、主水が娘を呼び取つてくれるかくれぬか知らねども、マア、雁は八百、やりかけて見る心ぢや。

お辰 其序でに廊へ行て。そなたにも逢はうと思つて、様子を聞いて、こゝへ来たわいの。

尾上 そりやよう来て下さんなした。その代りに、お前の事は氣遣ひさしやんな。言ひ號けの主水様は、わたしが云ひ交した殿様の御家來なれば、殿様を頼んで、お前を女房に持つて上げいと、言ひ附けてもらふわいなア。

平次 イヤ、そりやわるい。

尾上 エ、。

平次 ハテ、おれも以前は桃の井の家中。聊かな事て浪人して、母が大病、人參代に此妹のおみきを、室の扉へ勤め奉公に出して、今、若殿陸次郎様と言ひ交した此様子。子返にしてもおれが素性を、必ず、若殿様へいふな、隠し置けといつたも、若し歸參が叶うた時、若殿の言ひ交してござる傾城は、近藤平次兵衛が娘、其かびて元の武士に立歸つたといはれては、先祖より傳はつたる近藤の苗字に疵が附く。それより矢ツ張り貧しうても、土百姓の方がましと、常々言ひ附けた通

り、姉が事も素性も必ず若殿様へ申し上げな。

尾上 サア、そりやよう合點して、深う隠してゐまするわいな。

お辰 あゝいふ堅いと、様の生れつき。其坊も産み落しやると、在所へ連れていんで、育つるも男の子ぢやによつて、國の跡目など、卑劣な願ひなどはせぬ氣質。

尾上 サア、其時にわたしも、懷妊の事をいうたれば、家中の手前、大殿様の聞え、必ず密かに育てくれいと仰しやつたゆゑ、おまへ方に、世話になりますわいなア。

平次 ハテ、若殿の胤でも、腹は賤しいおれが娘の産んだ悴。たとへ國の跡目にと迎ひが來ても、めつたには渡さぬ。

軍内 太夫どの。尾上殿はどれへござつた。

お辰 妹、アレ、誰れやら呼ぶぞや。

尾上 今日は殿様や皆と此天神様へ參詣。わたしを呼ぶは、大方家中の衆でござんせう。

平次 そんなら、こゝにゐて逢つたら面倒な。サア、姉、おぢや。

尾上 ア、と、様、折角ござんしたのに、まだ話したい事もござんす。姉様と一しよに、どこぞでちつとの間、待つてゐて下さんせいなア。

平次 ムウ。イヤ、まだ主水が尾敷へ行かねばならぬが、お辰、妹があつたやうにいふ事、あの向うの馬場先きの茶屋で、

お辰 どうぞさうして下さんせ。わたしもまた、妹に話したい事もあれば、ナウ、妹。

尾上 どうぞ待つてゐて下さんせ。(ト内より)

軍内 尾上どの。

平次 何かは後に。サア、姉、おぢや。(ト平次兵衛、お辰橋懸りへ入る。尾上見送り、しかくある。内より軍内出て)

軍内 太夫どの。尾上殿、これにござるか、先き程より、一べん尋ねてをりました。

尾上 そんなら、殿様が呼んでかえ。

軍内 イヤ、若殿ではない。御家老の内膳様が、こなたに此文を密かに渡せとあつたれど、人目が有るゆゑ差し控へてをつた。コレ、太夫どの。(ト内より封じた状を出し、渡す。)

尾上 内膳様から此文をわたしに。(トこなしあつて) またいつもの通りに、(ト封を切り) 御覽も御面倒ながら、又々文として申上り。(ト讀み、あは口の内にて讀み) エ、しつこい。また此やうな。(ト状を打ちつけうとして、思ひ入れ有つてひんねちて置るへ入れる。)

軍内 太夫殿。御家老よりの御状は、何の用でござる。

尾上 サア、内膳様からは、ほんにあらうことか、あるまいことか、(ト言はうとして) サア、殿様を随分大切にせいとお文ぢやわいなア。

軍内 ハテ、それはきつい忠臣でござる。

ト言ふ所へ、臆病口より陸次郎、八重菊丸、大藏、兵治、陸花、子供、皆々才兵衛を連れ出る。

大藏 是れは尾上殿、先き程より若殿のお召し、これに何してござつた。

尾上 サア、わたしはナ。……アノ、オ、ソレ、最前取り交した殿様の御發句の短冊を失うたゆゑ、もし爰に落ちてあるまいかと、それを尋ねてゐるわいなア。

大藏 ハテ、失うたらお願ひ申して、又書いて貰うたがよいわいの。

陸次 タ、太夫、ダ、大事ない。ホ、發句が失せたら、マ、また書いてやる。ソ、それよりは、オ、弟の、コ、此八重菊丸。……皆、何ぞして、ナ、慰めてくれ。

八重 是は兄上様の、お心遣ひ、御無用になされて下さりませ。わたしはあなたのお顔を拜しましたが何より嬉しうござります。

大藏 ハテ、睦まじい御兄弟。いつそ是より若殿、若君、御同道にて、席へ行つて騒いだらどうでござ

りませう。

軍内 成る程。幼い時からお山にござる若君。席へお供致したら、餘念はござりますまい。

兵治 毎日お供に行く、われくさへ、いつ行つても飽きませぬ面白さ。何が色共が舞ひうたふを、若君のお目にかけたら、お目に佛はござりますまい。

才兵 左様なら、あの若君をお供して、私し方にて大騒ぎ。飲めや、唄へや、一寸先きは闇の夜、ワイくのワイと。とつと席へ歸りませう。

源吾 イヤ、若君を席へ、お供は御無用になされ。

大藏 そりや、なせてござる。

源吾 ハテ、御出家のお望みて、佛道を歸依なさるゝに、法外な席の遊び、お心に叶ひますまい。ナア、若君様。

八重 成る程。わしは廊の遊びより、お山へ歸るが勝手。兄上様、失禮ながら、私しはお暇を願ひ上げます。

陸花 ほんに、殿様の弟御に似合はぬ、物堅い、若君様ではあるわいな。

此浦 ほんに、美しいお若衆様を、坊様にするは、惜しいものぢやわいなア。

ト在郷唄になり、向うより加古川三平、木綿やつし。母おくま、負はれて来て、花道にて、
三平 申し、母者人は、じゃひと。もうこゝが會根の天神様。御參詣なされませ。(トおくま負はれながら)
くま イヤ、天神様は面白うあるまい。向うに大勢人がゐる。ちやつと向うへ、連れていけ。
三平 畏りました。(ト三平、おくまを負うて本舞臺へ来て、皆々の前を、つかつかと行く。)
軍内 ヤイ、下郎め。若殿の御前ごぜん先き、見苦しい。下りをれ。
兵治 下りをらぬか。(ト口々にいふ。三平びつくりして戻る。)

三平 それとも存じませず、不調法、御免されて下さりませ。(トいひ、花道へ戻り)コレ、申し、母者人、向うにござるは此國の若殿様。お前を連れて行きたいけれど、今のやうに、慮外者ぢやと、侍ひ衆が呵つてござる。おりやどんな目に逢つても構やしませねど、お前に怪我があつたら……いつそ高砂の方ほうへなりと、舞子の濱へなりと、連れて行て、慰めますてござりませう。
くま イヤ、高砂も、舞子の濱も、昨日行たぢやないか。おのれ、侍ひ衆の呵るを幸ひに、連れて行きとむないのぢやな。

三平 ナンノマア、お前、そんな事ぢやござりませぬ。連れて行ても、却つてお前の慰みにくま イヤ、ぬかすなく。親の言ふ通りにせぬ。こゝな、不孝者め。

ト負はれながら、あたまを掻きむしる。

三平 ア、申し、母者人、もう、料簡して下さりませ。向うへ連れて参じますわいなア。
くま そんなら、料簡してこます程に、早う向うへ連れて行け。
三平 アイ、(トこなしあつて本舞臺へ行く。)
軍内 性懲りしやうこもない下郎め。いつそ老いばれ共に打ち殺して。(ト刀に手を掛ける。)
三平 ア、コレ申し、(トびつくり。逃げる拍子におくまを落とす。)
くま アイタ、。コリヤ、どうしをる。死ぬるわい。
三平 ア、コレ、申し、母者人、(トおくまを抱き起し、介抱する。)
軍兵 ハテ、憎い下郎め。
三平 ア、コレ、申し、待つて下さりませ。
くま 痛いわい。
三平 アイ、さすりますわいなア。

ト足さする。ト軍内、兵治「慮外な」と切らうとする。三平、こちらをなだめる。トおくま「痛い」といふを介抱したり、こちらを留めたり、此模様二三度あつて、三平、おくまの掩ひになりて、さすり、兩人

を留める。

大藏 待て、二人。最前から慮外な下郎め。今手討ちにせうより、縄ぶつて屋敷へ引き、きつと仕置きに行へ。

軍兵 ハア。下郎め、腕まはせ。

三平 ア、申し、マア、お待ちなされて下さりませ。私しは此國の傍に住みまする者でござりまするが、天にも地にも、たつた一人の母者人。内にゐては退屈する、方々へ連れて歩けといはれますよつて、商賣の片手には、此やうに見物をさせます。只今も向う、わきたいといはれまするによつて、それ連れて参りまするところ、此お國の若殿様とも存じませぬが、私しの不調法。母者人が知られた事ぢやござりませぬ。繩かけてお仕置きになされませぬなら、私しばかり、どの様になりとも、年寄つた母者人は、どうぞお助けなされて下さりませ。お慈悲でござりまする。拜みまする。どうぞ殿様へ、宜しう仰しやつて下さりませい。ト拜みまはる。

軍内 イヤ、ならぬ。親子共に繩うつて屋敷へ引く。腕廻せ。

くま アレ、怖いわい。ちやつと、連れて退けい。

ト三平背中へ取り附く。三平「アイ」といふ。

軍内 動いたら、手は見せぬぞ。

三平 ハイ。

ト下にゐる。おくま「こはい」と逃げて騒ぎ立てると、「動くな」ときめる。三平、うる。

「サアサア」ともみ上げる。

陸次 ア、あれ静めい。

源吾 二人、待つた。

軍兵 ハア。

大藏 若殿様御前とも憚らず、慮外な下郎め。なぜおとめなさる。

源吾 イヤ、大藏どの。最前より若殿も、拙者も見請けますれば、下郎が慮外は親孝行、それゆゑ、お免しの御意でござる。

陸次 オ、ユ、許してやれ。

八重 兄上のお詞といひ、親孝行の者、大藏、免してやつたがよい。

尾上 ほんに、格好に似合はぬ親御に孝行なお人。こゝへ呼んで、母御を慰めてやつたがよい。ナア、殿様降治 オ、親子の者を、コ、こゝへよべ。

大藏 イヤノ、見苦しい下郎め、其儀はよしに遊ばされませう。

源吾 イヤノ、大藏殿、さやうではござらぬ。親孝行には、元正天皇も美濃の國へ御幸あるとござれば、苦しいござらぬ。コリヤ、下郎、若殿のお召し、是れへ参れ。

三平 ハ、参りましても大事ござりませぬか。

源吾 そちが孝行ゆゑ、若殿がお許しなさるゝ。近う参れ。

三平 ハイノ、有り難うござります。サアノ、母者人、お許しが出た。ちやつとござりませ。

トおくまを連れて行く。

源吾 ヤイ、其者はそちが眞實の親か。

くま イエノ、こいつは私しが爲には權子でござります。十歳の年から世話して育て、今あのやうに成つてをつても、金儲けもようせず、わしに不自由をさしますわいなア。

三平 私しが甲斐性が無いゆゑ、年寄つた母者人に、不自由なめをさすが悲しいござります。

源吾 それも、渡世をせず、母親に仕へるゆゑに其管ぢや。シテ、此お國の者ぢやといふたな。

三平 ハイ、さやうでござります。

才兵 ハア、さてはとうから噂の有る、播磨の親孝行とはこなたの事ぢやの。

三平 どうぢやか存じませぬ。

八重 誠に、忠孝全きは其身に幸ひを得るとあるが、其方は下郎に似合はぬ、奥床しい者ぢやなア。

くま 何の、奥は廣い事はござりませぬ。釜の前かけて、六疊敷きに親子二人住み。こいつは見かけに似合はぬ大ごうでござります。其證據は、第一が正直で、博奕は打たず、酒は喰はず、朝は暗い内から起きて畑へ行て、戻つてくると、わしに茶を沸かして、飯を食はしをる。菜は、好きな鮒や鰯を買つて来て、わしばかりに食はしをる。淋しうなると、此やうに負うて歩いて、いぬると、肩を揉んだり、足をさすつたりして、寝ると蒲團を叩き附けて置く。あのやうなごうが、よう有つた事でござります。

軍内 そりや一々よい事ぢやに、ごうどうといふばアめ。おのれがごうどうぢやわい。

此浦 アレ、見やしやんせ。見かけから怖いば、様ぢやわいなア。

子供 わしらも、あゝいふ親を持つたら、悲しい事であらうぞいな。

くま アレノ、聞きをつたか。おのれがごうどうぢやによつて、おりや皆様に、笑はれるわい。

ト三平を引附け、散々にくらはす。

三平 御尤もでござりますノ。(ト詫びる。おくまくらはずし。)

源吾 コリヤ〜、母。そりやそちが無體ぢや。其やうに打ち叩き致すな。

三平 ア、申し〜。お構ひなされて下されますな。常から母者人の腹のいる程、打ち叩きなされねば、機嫌が直りませぬ。

八重 唐土らっこしの伯實は、母が打つ杖の弱りしを歎くとある。それに劣らぬ、あの者の孝行を思へば、わしらが及ばぬ事。

陸次 オ、さうぢや。ア、ア、あの者に、サ、酒を飲ませ〜。

兵治 ハツ。(ト銚子、盃を持っていて)若殿様の仰せ、ト此、有り、思、て戴きおれ。(ト三平が前に置く。)

三平 これは〜。御大身のお詞、われ〜に、お酒を下されますとは、冥加ない仕合せでござりまする。

ト戴、うとするを引ツたくり

くま こりや、おれが飲む。つぎをれ。

三平 アイ〜、殿様の御酒ぢや、有り難う思うて上がりませ。

ト三平注ぐ。おくま飲む。皆々憎てらしがる。才兵衛見かれて菓子盆を持って

才兵 コレ〜、息子、酒は母にとられても、貴様は此菓子を食べたがよい。(トやる。)

三平 これは〜 重々ぢやくのお情け。エ、有り難うござります。(ト戴く。又おくま引ツたくり、紙にてくる

くるまき)

くま 此菓子はおれが後に食ふのぢや。(ト袂へ入れる。)

皆々 ハア、憎いばいめぢや。

三平 イエ〜、私しは何も欲しうはござりませぬ。母者人さへ機嫌よう上がりますると、私しは嬉しうござります。(ト此内おくま酒を飲みまひ)

くま ア、酒を飲んだら、どうやら寒い。さむなつたわいやい〜。

三平 エ、必ず風引いて下さりますな、母者人。(トいひ〜帯を解き)どなたも、お免しなされて下さりませ。(ト着物を脱ぎ、丸裸になり、おくまに着せる。)

源吾 いかにかに孝行とは云ひながら、裸になつては、母より其方が風を引いてあらう。

三平 イエ〜、益體やくたいもない。母さへ暖かなら、私しは寒の内でもかまや致しませぬ。

ト此うち八重菓子こなしあつて、わが羽織を脱ぎ

八重 源吾、これをあの者へ。(ト抛る。)

源吾 ハツ。(ト取つて)そちが孝行を思し召し、若君様のお羽織、有り難く、戴け〜。

三平 これはマア、結構なお羽織。私しは此やうな物、つひぞ着ました事はござりませぬ。

陸花 屈引いたらわるい。ちやつと着やしやんせいなア。

三平 イエ／＼、それでも勿體なうござります。

尾上 君様のお志し。それ着せて進じやいなう。

子供 アイ／＼、サア、着やしやんせいなう。(ト子供皆々三平に無理に着せる。)

三平 これはマア、有り難いといはうか、何と申しませうやら。

くま コリヤ／＼、其羽織おれにくれい。此布子はおのれにやるわ。

ト脱いで抛る。三平「アイ／＼」と羽織を着せる。

軍内 ハテ、いはうやうもない、慾田の引ッばつた胸慾ばぢぢやなア。

陸花 あの母御が憎てらしい程、あの人が

皆々、いとしいわいなア。

軍内 いつそ、ばゞめを。

三平 ア、申し、お待ちなされて下さりませ。勿體ない、其やうな事いうて下さりますな。たとへ母

者人が、どのやうにいはいはしやつても、孝行にするが子の道ぢやと申します。父の恩は高き山、

母の恩は深き海とやら。

才兵 ヤア／＼、貴様、ませた事知つてゐるの。

三平 イヤ、私は何も存じませぬが、こつちの方の物識り殿の話してござります。親といふものは因果なもので、子が餘所へ行くと案じます。

才兵 イヤ／＼、さうでない。子が餘所へ行くと、助かつたと悦ぶわいの。

三平 サア、そこぢやテ。

才兵 どこぢやの。

三平 此やうな事いふと高慢くさいが、父母います時は遠く遊ばずとは、物識りの教へ。

才兵 ハテナウ。

三平 父親の恩は須彌山の山より、富士の山より高いげな。母の恩は蒼海より深いといふが、龍宮よりまだ／＼深い所ぢやげな。すりや、二親にどのやうな孝行しても飽き足りませぬ。鳥や雀は少さい折に、親に餌をくはして貰ひ、大きくなつてはまた餌を持って行て食はす。鳩は親のとまつた枝より上へ止まらず。それよりすさまじい獸、熊も其通り。鳥や畜生でさへ、孝行はするもの。人間は親に孝行にする、珍らしい筈。唐から渡つた何とやらいふ本には、此體は親の産みつけた體、疵はおろか怪我しても、すりむく事もならぬげな。なぜならば、此體は皆親のもの。そ

れに兩親の内に居られる間は遠く遊ばぬ物ぢやげな、なぜならば、内の親は、此息子はどこへ行て
ゐる、病ひは起らぬか、目はまひはせぬかと、親の因果で子の事を始終案じるものぢや。其案じ
を休める爲に、早ういぬるが第一番の孝行。それを知らずに、今時の息子は、麻とやらへ遊びに
行て、美しい女郎を呼んだり、酒を飲んだり、旨い物の食ひ飽き。其やうにするも皆親の蔭、親
の光りは七光りとやらで、親の有りやうは、たとへ人中で不調法しても、親に免じて料簡をするげ
な。丁度私しがあのやうに母者人を連れて來たればこそ、今、若殿様の、菓子ぢやの、お酒ぢや
の、お羽織ぢやのと貰ふも、母者人を負うて來たゆゑ。そんなら、親といふものは有り難い、忝
いもの。それを浮かくと親の事思はぬは大きな馬鹿といはうか。阿呆といはうか。ごくどうと
いはうか。人間ではない、畜生でも、鳥でもない、トサア物識りが異見をしられたによつて、そ
れからわしや、あの母者人を随分大切に、大事々々と思つても、まだ行き届かぬによつて、ぶた
れたり、叩かれたりします。孝行にしますと思つてゐるけれど、矢ッ張りく、不孝なによつて
でござりますわいなア。

源吾

ハテ、下々に似合はぬ、頼もしいものぢやなア。

ト此うち陸次郎始終聞いてゐる。思ひ入れあつて、つかくと花道へ行く。皆々留めて

尾上 申し、殿様。こりや、どこへござんすぞいなア。

皆々 若殿様。何れへお出てなされますな。

陸次 サア、オ、大方、キヨ今日で五十日程、ク廓に。ソ、それぢやによつて、
皆々 いづれへ、お出てなされる、な。

陸治 ヤ、屋敷へ歸つて、オ、親人の御機嫌うかゞふ。(ト振り切り、向うへツイと走り入る。)

尾上 コレイナア、わたしも一しよに。(ト走り入る。)

陸花 尾上様、わしらも行くわいなア。(ト陸花、此浦、子供皆々走り入る。)

八重 源吾、わしも兄上を御門前まで見送る。おぢや。(ト八重菊丸、源吾入る。)

大藏 エ、らツちもない事若殿のお歸り。兩人とも、來やれ。(ト大藏、軍内、兵治侍ひ皆々入る。)

才兵 何の事ぢや。おれも附いて行かざばなるまい。

ト走り入る。ト合ひ方になり、三平、おくま残りこなしある。ト橋懸りより古佐壁主水、着附け、袴、
羽織、深編笠にて出て、笠を取り

主水 親子の者、出かした。

三平 古佐壁主水様、あなたの仰せの通り、

くま 息子と二人、首尾ようやッ附けました。

主水 若殿陸次郎様は、お生れ附き痲症にて、舌を釣りこんせつも通らず、少しの事もお氣に障り、逆上して猶々御病氣の障り。それゆゑ一家中は心を置き、随分心にさからはぬやうと、大殿の仰せ。ところに、さいつ頃より、室の廊へお通ひ有つて、お身持ち放埒、御諫言申し上げたうも、右のお生れ附きゆゑ、其儘に差し置くところ、いよく募つて御身の奢り。某が思案を以て、そち達を頼みしに、われと御得心なされ、屋敷へお歸りあるは思ふ壺。そち達が働きのゑ。

三平 是れは有り難い御家老様の、お詞、私しの實の母は、若殿様を育てました乳母めのと。病死せられて、後連れの此母者人。只今にては加古川で宿屋は致してをりますれど、私しも先祖は山緒止しき者の子孫。母者人の縁といひ、まんざら外のお家のやうには存じませぬによつて、あなたのお頼み、今の働き。

くま 私しも事多い中を、三平が無理に連れて来て、負はれ廻つて歩いたも、首尾よう若殿をいなしましたら、あなたの御褒美を貰はうと思つて。

主水 いかにも。禮は追つて。まづ是れはそちへ身共が。(ト紙入れより金拾兩程出してやる。)

三平 其お金を申し請けましては、私しがいかにもお家へ、

主水 イヤ、こりや、母へのみや、かし。

くま コレ、三平、主水様のあのやうに仰しやるお志し、戴いて置ませう。(ト懐ろへ入れる。)

三平 ア、コレ。(ト氣の毒がる。)

くま 何をおのれが、ちよこ才な。(ト最前の羽織を出し)此羽織は結構な物ぢや。こりや矢ッ張り持つていんで、お露にやる。

三平 主水様、加古川へは餘程の道。母者人をつれて、私しはもうお暇申ませう。

主水 成る程。勝手に致せ。親子とも大儀で有つた。

三平 何の苦勞な儀はござりませぬ。追つてお屋敷へ参りませう。サア、母者人。

くま オイ、内も氣にかゝる。一時も早う去にませう。

三平 ハイ、左様ならば、主水様。

主水 大儀であつた。

と唄になり、三平、おくまをつれ、横懸りへ入る。主人一人残る所へ、近藤平次兵衛、矢ッ張り子を抱きながら、お辰と連れ立ち出る。

平次 お辰、妹に駈へ去にはせぬか。

辰 サア、きつう隙ひまがいらいますわいなア。(トいひく出て来て、主水と顔見合せ)

平次 ヤア、こなたは古佐壁主水殿。

主水 さう仰しやるは、近藤平次兵衛殿。

辰 ほんに、と、様、主水様ぢやわいなア。

主水 御息女お辰どの。

辰 こりやよい所で、お目にかゝりましたわいなア。(ト主水、平次兵衛が手を取り、上座へ直す。)

平次 百姓のおれが高上がりは緩怠。矢ッ張り(ト下がらうとする。主水上に置き)

主水 イヤ、平次兵衛殿、今、御浪人なされても、以前は桃の井家の御家老、親共とは御傍輩、分け
て懸意の仲。お辰どのとは言ひ號なづけの儀もござれば、まづく。

平次 ムウ。主水殿、そんなら以前の言ひ號なづけの縁が有るゆゑ、今浪人して百姓の平次兵衛でも、上座
に置いて下さるか。

主水 ハテ、益やくたい體もない。何を仰せらるゝ。

平次 娘、悦べ。そちが願ひは叶うたぞ。

辰 と、様、思ひがけなう主水様のお顔を見て、わたしや嬉しうてなりませぬわいなア。(トこなし)

主水 さうして平次兵衛殿には、見れば稚こい子を抱きて、此ところへは、何用有つてお出てなされたナ。

平次 イヤ、此子はちつと仔細あつて、預かりもの。又娘をこゝへ連れて来たは、有りやうはこなたの
お目に懸けうため、お屋敷へいつた所が、他行。思はず逢ふは盡せぬ縁といふもの。こなたに、
分けてお頼みは、(トいはうとして)娘、委細の事は主水殿に、そなた言や。

辰 と、様とした事が、それがどうして、私しがあなたに言はれる物かいなア。やつぱりお前仰しや
つて下さんせ。

平次 サア、後はおれが云はうが、初手はマアわが身言やいの。

辰 イ、エ、どうあつても、お前仰しやつていなア。

平次 ハテ、わが身が、

辰 イ、エ、お前が。

主水 ア、これはしたり、平次兵衛殿。お辰どの。御兩人ともに、其やうに仰しやるは、主水に仰し
やりにくい儀でもござるか。

平次 イヤ、さのみさうではなけれど、

辰 ツイ、と、様が仰しやつて下さんと、分る事ぢやわいなア。

平次 ちやというて、おれが、(トくどくいふ。主水思ひ入れありて、)

主水 エ、聞えた。平治兵衛殿。御息女お辰どのと拙者を、親共が言ひ號けいたした、大方、其儀でござりませう。

辰 アイ、左様でござりますわいなア。と、様。

平次 成る程。こなたと娘と言ひ號けはあれど、聊かの誤りておれが浪人して、大食谷へ引込みをれば、百姓娘も段々年がいて嫁入り盛り。前の事を忘れず、明け暮れこなたの事ばかりいうて案じてるゆゑ、親の身では不便さ。

辰 と、様の仰しやる通り、前の云ひ號けはあつても、今は百姓の事、押し附けわざな、サ、主水様は桃の井家では御家老なり、こちらは浪人。よもやわたしを呼び取つては下さりますまいと、と、様の仰しやる。わたしとても女房には御慮外、腰元、はしたとなりてなりとも、お館へいて、御用が聞きたいと、ナア、と、様。

平次 毎日々々、あのやうにいうて、おれをいぢる。せん方盡きて、今日連れて来て、屋敷へ行たも、以前の言ひ號けと言や異なるものなれど、娘が願ひの通り、腰元ちやと思つて、どうぞ呼び取つて下さるまいかと思つて。

主水 ハテ、過ぎ行かれし親共の約束。今は御浪人とあつても、百姓であらうが、下人であらうが、一旦契約を變じては、待ひてはござりませぬ。

平次 ムウ、そんなら以前の通り、アノ娘は、

主水 以前の言ひ號け、矢ッ張り拙者が女房でござります。

平次 娘、聞いたか。

辰 エ、忝うござんす。

平次 そんなら、こなたの屋敷へ呼び取つて、

主水 表向きの祝言を致さうと存じをつた。お辰どの、手前もかねて其心なれど、此處でお目にかゝる、思ひ掛けない俄の儀。又何かの用意を仕り、吉日を選び、此方より迎ひを遣はさう程に、暫くの延引は、平次兵衛どの。

平次 イヤ、もうそれを聞けば、たとへ一月二月延引しても、ナア、娘。

辰 わたしが様な不束な者を、女房にさへ持つて下されまする事なら、たとへ一年でも百年でも、待つてをりますわいなア。

平次 なに嘘をいひをる。晩からでも行く氣であらうが。(ト顔見合せ) ハ、ハ。そんなら、主水どの。

主水 平次兵衛殿。まづ今日は、

平次 歸らいて何とせう。お辰、必ず日限を、

主水 あとから、お知らせ申ませう。お辰どの、其心で、

辰 アイく、わたしは日本晴れがしたやうなわいなア。

平次 道が遠い。暮れぬうちに早う去なうか。

主水 是れは御老人の遠道、屋敷より送らせませう。

平次 何の益體もない。百姓すりや達者な。サアく、娘。

辰 左様なら、主水様。

主水 平次兵衛どのに心をつけて、靜かに。

辰 アイく。

平次 サア、娘、おぢや。(ト唄になり、平次兵衛、お辰、いそく向うへ入る。)

ト橋懸りより主水の家來、挟み箱を持ち、槍持ち、其外草履取り、侍ひ出て、

侍 お旦那様、もはや神参りの刻限。イザ、神前へ。

主水 ムウ。殿の御代参なれば、上下。(ト挟み箱より上下を出す。主水羽織を脱ぎ上下を着て、こなしあつて)

家來、供せい。

侍 ハア。

ト唄になり、主水、侍ひを連れ奥へ入る。

返 し

築地塀、梅と松を引き込む。黒幕切つて落す。

向う一面の二重舞臺。見附けは襖。上の方塗骨障子屋體。よき所に手水鉢、是に懸け纏しかけ、水流れ
れ出る。

前に萬年青植みてある。總て桃の井屋敷の體。ト向うより「お上使のお入り。」ト太鼓論ひに成る、奥

より桃の井修理太夫、大殿の形にて小姓、上下の侍ひ數多連れ出て迎ふ。

向うより生田兵庫之介、鹿間大學、着附け、上下にて、出て來て

兵庫 桃の井修理太夫殿。貴殿は内緒ある拙者。それゆゑ此たび東山殿の上意を蒙り、罷り越したる

生田兵庫之介。

大學 領内ゆゑ、加役御せ附けられたる鹿間大學。

修理 兵庫之介は拙者が弟、家門の儀。大學殿には、お役目御苦勞に存じます。

兵庫 役目なれば、罷り通りまする。イザ、大學殿。

大學 まづく。(ト大學、兵庫之介、二重舞臺へずつと直る。)

修理 シテ、御兩所様、東山殿より此修理の太夫へ御上意の趣き、仰せ聞けられ下さりませうならば、有り難う存じ奉りまする。

兵り 此たび東山の武將義政公、茶道に心を寄せられ、和漢の銘器を御懸望。それゆゑ常桃の井家には、赤松家より傳はりし園城寺の花瓶、東雲の香爐、今世に稀な銘器。義政公御上意ありたき仰せ、二色の寶を修理太夫に、急ぎ差上げよとの御上意。

大學 まつた修理太夫子息、陸次郎殿は、とくより武將に、お目見えも有るべきところ、長病とあつて未だ上洛もない故、陸次郎殿病氣の様子を、篤と見届けよとの、是れも東山よりの御上意。

修理 ハツ。成る程、園城寺の花瓶、東雲の香爐は、先祖桃の井播磨守、軍功によつて申し受け、家の重寶と存するなれども、東山殿の仰せ、何しに違背仕りませう。まつた伴陸次郎儀は、年移るに従うて長病、醫療手を盡すといへども、未だ快氣仕らず、追つて保養を加へ、上洛致させませう。

大學 ずりや、修理太夫殿、陸次郎殿は、いよく病氣とな。

修理 ハツ。

大學 ムウ。ハ、ハ。修理の太夫殿、偽りも大概に言はツしやれい。常家の子息陸次郎殿は、随分堅固

て室の廊へ通ひ詰め、晝夜の騒ぎ、人は知らぬと思つてござつても、大學よく存じをるぞ。

修理 イヤ、其儀は。

大學 廊通ひの大病は、色と酒との熱に浮かされ、晝夜の奢り。御上意といふ配劑で、桃の井家没收といふ良薬でなければ、中々快氣は致されまい。

兵庫 イヤ、大學殿、そりや何を仰せらるゝ。たとへ甥の陸次郎、廊通ひ致すとも、病氣によつて養生の手だてもある。それを此方より吟味致す儀には及ばぬ。何分陸次郎病氣快氣ならば、明日でも出立有つて、お目見え致させなば事相濟む儀。それを仰山に、イヤハヤ、らとお嗜みなされい。

大學 ムウ。

兵庫 ナニ、修理太夫殿、必らず當惑致されな。右の趣き陸次郎に仰せ聞けられ、お目見えあるやう、御合點か。

修理 ハツ。伴に篤と申し聞かせませう。

大學 兵庫之介殿、こなたは常家の御家門。それで陸次郎殿儀、ハテ、結構な御料簡でござる。

ト此うち向うより陸次郎、尾上、陸花、子供皆々、源吾、大藏、軍内、兵治出てくる。修理太夫思ひ入

れ有る。

修理 悴、東山殿よりお上使がお立ちなされてござる。

陸次 ハツ。(ト下にゐる。皆々も下にゐる。)

源吾 すりや、都よりのお上使は、生閉兵庫之介様、

大藏 鹿間大蔵様でござりまするか。

修理 いかにも御兩所。(ト陸次郎ずつと前へ出て)

陸次 ゴ、御兩所様には、オ、お役目御苦勞、セ、千萬に存じます。

大學 ムウ、すりや、子息陸次郎殿には、噂に違はぬ言舌通らぬ吃り殿でござるの。

兵庫 なんと、陸次郎お目見えの延引、病氣の様子、篤と見届け召されたか。

大學 成る程。篤と見届けましたが、桃井陸次郎に繩打つて都へ引きます。(ト立ち上がる。)

兵庫 そりや何の科で。

大學 桃の井陸次郎は謀叛の張本。

兵庫 何が、なんと

大學 證據は即ち此發句。何と覺えがあらうが。(ト見せる。)

陸次 ナ、成る程。ソ、そりや私しが、タ、たわむれに仕つたホ、發句。

源吾 憚りながら、大學様、若殿の其發句が、どうして謀叛でござりますな。

大學 さればさ。此發句は東山殿を調伏せんと、會根の天神へ上げ置いたに違ひない。謀叛の證據「花とみつ傾城どもの立ち姿。」此心は「花とみつ」とは都、傾城の文字は城かたむける、都の城を傾けんとは、足利家を亡ぼし、われ日本に立たんといふ「花とみつ傾城どもの立ち姿。」何と合點がいたか。誠に、自筆をもつて、陸といふが即ち謀叛の證據。

源吾 すりや、其發句が謀叛の證據とな。

大學 いかにも。

陸次 サ、サ、ア、あれは、ソ、そなたも、シ、知つてゐる、ツ、ツイなぐさみの

大藏 でも、御上使の仰せ。謀叛に極りました。

尾上 イエ、左様ぢやござりますまい、大藏様。

大藏 コリヤ、傾城。わりや若殿と言ひ交はしてゐる傾城の尾上。大切な場所、そち達が差し出る事はない。控へてをれ。

尾上 それでも殿さんの御難儀、有りやうに申し上げます。お上使様とやら、憚りながら、其發句は殿

様のなれなされましたのではござりますれど、けふ啞返し神事といふ事を、曾根天神様で御遊興になされて、わたしが歌と取り替へましたのでござりますわいなア。

陸次 オ、ソ、さうぢや。其時、タ、太夫と、ト、取り替へた歌は、コ、こ、こにある。

ト懐より出して見せる。兵庫之介これに目をつけ、是れにて陸花、此浦、子供皆々が持つてゐる短冊を一々心で讀んでゐる。

大學 たとへ啞返しにもせよ、啞吹きにもせよ、此發句が身共が手に入つたがそちが天命。但し謀叛でないといふ證據があるか。

源吾 アイヤ、其證據は即ち拙者。今、尾上殿が申さるゝ通り、

大學 ヤイ、わりや陸次郎が家來。縁者の證據は役に立たぬ。

源吾 ても其發句にて若殿が謀叛とは、モ、みすゝな無實。

大藏 黙れ、源吾。お上使に向つて、詞を返す慮外は、御主人の越度となるが。

源吾 サア、それは、

大藏 控へておるやれ。

源吾 ハツ。(ト手を組み、思案する。大藏、大きな火鉢を取つて来て、陸次郎の前に置き)

大藏 苦殿、謀叛でなくば、鐵火を握つてお上使へ申し譯け。

尾上 エ、アノ此のほのほ焰を殿様に、

大藏 謀叛でないといふ言ひ譯、控へてをれ。(ト尾上を突き通し) サア、謀叛でなくば、此焰で鐵火の誓ひをなされ。

修理 悴、謀叛でなくば言ひ譯せい。謀叛に極きはまらば、親は勿論、桃の井の家の疵。早う申し譯を致せ。

陸次 ハツ。ミ、身に覺えない、ア、悪名、コ、此焰。(ト掴まうとする。)

兵庫 待て、陸次郎。

大學 兵庫之介殿、なぜお留めなさるゝ。

兵庫 されば、貴殿は發句を以て謀叛と有れど、陸次郎身を取つて覺えなければ、是れ無實の難。

大藏 ぢやによつて、此鐵火を取つて其申し譯に。

兵庫 イヤ、鐵火に及ぶまい。コレ、こゝに(ト陸次郎が出した短冊を出し)「鳥もなく鐘も聞えぬ里もがな、ふたりぬる夜の隠れ家にせん。」と、是れ即ち菅家の御神詠、また羅綺ろき爲な重衣じゆうい妬な無情於な機婦はたな、管弦在長曲怒ながまが不關於伶人なげん此詩を日に一度づゝ唱ふる者は、三度かけりて誓はんと、御一代の御製作。菅原は即ち天満宮。無實の難を救はんとある神の恵みなれば、陸次郎、謀叛でな

いといふ申し譯は相立つてござらう。

大藏 それはどうして

大學 言ひ譯が立ちますな。

兵庫 大學殿、證據の發句は何とやらな。

大學 「花とみつ傾城どもが立ち姿。」花は郡、傾城はかたむく城。城傾けて世に立つといふ證據の發句さ。

大藏 若殿の謀叛のおとがめ。

兵庫 イヤ、其發句が謀叛の證據にならば、大學殿、貴殿も繩かゝらねばなりませんまい。

大學 兵庫殿、さまざまの事御意なさる。なぜ拙者が繩かゝらねばなりませんな。

兵庫 其證據は。(ト陸花が持つてゐる短冊を見て) 小姓ども、あの者が短冊、是れへ。

小姓 ハツ。そな女、短冊これへ。

陸花 ハア。(ト兵庫之介の前へ持つて来る。小姓取つて)

小姓 下がりませい。(ト陸花あとへ下がる。)

兵庫 ソレ、讀み上げい。

小姓 「だサかサれサテサねサたサイ」とござります。(ト兵庫之介へ渡す。見て)

兵庫 「陸様まるる、だいより。」大學殿、これ覺えがござるか。

大學 イ、ヤ、覺えはござらぬ。

兵庫 覺えないとはいはれまい。こなた今日こんにち上使に立つ事を、内々にて陸次郎へ知らし、賄ひを取らしやるの。

大學 何がなんと。

兵庫 イヤサ、證據は此書き附け。「だサかサれサテサねサたサイ」とは賄ひを乞ふ替へ文句、他見を憚り「陸様まるる、大より。」むつ」とは即ち陸次郎が陸の字。「大より」とは大學お身が名がしら。

大藏 イ、ヤ、其大の字は即ち此大藏、むつ様とは傾城の陸花。また「だサかサれサテサねサたサイ」とは、抱かれて寝たいの中へサの字を一つづ、挟んでいふ、是れも廓の戯れてござる。

兵庫 イ、ヤ、其言ひ譯、くらいく。

大藏 よし又それが身共が書いたのにして、どうして、陸次郎に賄ひを乞ふ證據になるな。

兵庫 夫れ五音四聲は平上ひらかみ去入やうきよにふ。舌骨唇清濁の假名を正せば「さしすせそ。」「さ」は「せ」に通ふ。此假名の「さ」を「せ」に直せば、「だせがせれせせせせせ」と出せ、貸しやれ」といふのさ。賄ひを

ひ申す證據にはなるまいか。

大藏 すりや、「だサかサれサテサねサたさい。」これを「せ」に直せば「出せかせれせてせねせたせい。」

大學 あれを賄ひの替へ文句にして

大藏 それが「陸様まるる」は

兵庫 陸次郎が陸の字。

兵庫 「大より」といふは、

大學 此大學が大の字とな。

兵庫 なんと、是れが證據にはならぬかな。

大學 テモ、無理な理窟をつけて言はしやるの。

兵庫 サ、これは下世話にいふ「おがくずも云へばいはる、」。「花とみつ」の發句を證據と有れば、此

書き物をもつて貴殿にもうすが、サア大學、陸次郎が謀叛か。

大學 サ、それは、

兵庫 但し發句を證據とあれば、賄ひの證據を出さうか。

大學 サ、それは、

兵庫 サア、

大學 サア、

兩人 サアくく、

兵庫 コレサ、大學殿、どうでござる。

大學 ムウ、陸次郎は謀叛ではござらぬ。

兵庫 さやうならば。(ト右の短冊をす々に引きさき捨てる。)

これで互ひに言ひ分はござるまい。

大學 ハテ、手奇麗な、なされ方ぢやなア。

源吾 兵庫様の御賢慮にて、若殿の、お身の上、

陸次 ム、無實の難を遁がれしも、

尾上 これ、あなたのお情けゆゑ。

兵庫 なんの、是れも菅原の御神徳。幸ひな處にアノ(ト陸花を教へ)「宵の間や、都の空に住みもせて、」

折角「心づくしの有明の月。」(ト二重舞臺へ上がる。ト大學、大藏目配せして)

大學 イヤ、兵庫之介殿、謀叛でない言ひ譯は立つても、陸次郎が摩訶不思議の條々、身持ち放埒の

言ひ譯はな。

大藏 なんぼう兵庫之助様でも、若殿の放埒の越度

大學 此言ひ譯は、めつたにはござるまい。(ト向うより)

内膳 其申し譯は、印南内膳が仕りませう。(ト印南内膳、着附け、上下にて出る。)

大學 ヤア、兄者人。

修理 内膳、其方も出仕なく、主水は代參、兩家老とも遅參ゆゑ、心を痛めをつたわやい。

陸次 コ、コレ内膳、オ、お上使様が、

内膳 サ、ようござりまする。お心を揉まれますな。御病氣の障り、まづく落ち附いてござりませ。

尾上 申し、内膳様、どうぞ殿様のお心の休まるやう。

源吾 申し譯をこなた様が、

内膳 いかにも。大殿にも、若殿にも、何れもお案じなさる、儀はござりませぬ。憚りながら、兵庫之

介様は御家門の儀。大學様には始めて。拙者儀は當桃の井家の政道を預かりをる印南内膳。

大學 ムウ。シテ、家老内膳、陸次郎が言ひ譯とは。

内膳 ハツ、お次ぎにて様子承りますれば、東山義政公の御上意にて、當家に傳はりまする園城寺の花

瓶、東雲の香爐、右二品の寶を差上げ、若殿陸次郎を上洛致させよとの、御上意ではござりませぬか。

大學 いかにも其通り。が、陸次郎はあの通り、吃り。武將のお目見え、心元ない。

修理 内膳、仲があので産れ附き、お目見えの程が、

内膳 お氣遣ひあられまするな。拙者をりますれば、何かの取り計ひ、若殿にもお目見え致させまする。

陸次 コ、コレ、ナ、内膳、ソ、某が、ド、吃りて、ゴ、御上洛して、ヨ、義政公へ、オ、お目

見えシ、したら、デ、殿中で、シ、諸大名に、ワ、笑はれ、メ、面目ない。(ト泣く。)

内膳 ハチ、ようござりまする。お心揉まずに、落ち附いてござりませ。

大藏 イヤ、兄者人。若殿の吃り、押して御上洛有りては、成る程、都の笑ひ物。武將の仰せ、御評議

の役目など仰せ附けられた時に、あの吃りては勤められますまい。

内膳 何を、おのれが小ざし出た。お家を取り捌く某、控へてをらう。

ト白眼む。大藏手をもぢくして控へる。

源吾 アイヤ、内膳殿、言舌も通らぬ若殿ゆゑ、今日迄お目見え遅滞。それにお目見えをさせましては。

内膳 ハチ、サテ、これはしたり。若殿お目見えの儀は拙者が思案あれば、大殿を始め一家中、いづれ

も指圖なれず、控へてござれ、

兵庫 ムウ、さすがは内膳、其方の思案をもつて、陸次郎に目見え致さすとな。

内膳 ハツ。

兵庫 シテ、二色の寶は。

内膳 取りあへず差上げませう。

兵庫 ムウ。(ト、こなしある。)

大學 ハ、。何ぼう家老の内膳でも、實は差し上げうが、片輪同然の陸次郎を、都東山殿へ、お目見えさせうより、四條河原でも見物致させい。(ト源吾、尾上むつとする。内膳頗て押へて)

兵庫 これは大學殿には異なる事。兎角陸次郎が儀を案じなさるゝ。たとへ吃りてあらうが、片輪て有らうが、桃の井家の儀は、いらざるお世話。われらは上使の役目。他家の指圖は無用になされ。

大學 イ、ヤ、無用に致さぬ。こなたは御家門、拙者は領内、桃の井家の儀はきつと糺しますぞ。

兵庫 糺すとは何を、

大學 陸次郎が放埒。アレ、あの如く、室の廊の傾城遊女を、屋敷へ引き入れし身持ち放埒。ヤイ、内膳、そちや此言ひ譯するといつて出たが、言ひ譯あるか。

内膳 ござりまする。

大學、なんと。

内膳 ヤイ、弟、大藏、是れへ出をれ。

大藏 ハツ。

内膳 若殿身持ち放埒はそちが仕業。若殿をかこつて、なぜ自分の奢りはひろいだ。

大藏 イヤ、全くもつて。廊のお供はこなたの言ひ附け。

内膳 いかにも。若殿あの如く御病身のえ、鬱散の爲、廊通ひお勧め申したなれど、おのれが萬事取り計ひ、色と酒とを勧め込み、廊道へ引き込み、若殿を科に取つて落すといふ、そちがたくみ。

大藏 兄者人、そりや何を仰しやる。

内膳 知るまいと思ふか。かねて相ずり有つて事を計る證據の密書。(ト懐中より狀を出し)「かねて申し合せし通り、陸次郎に随分廊の奢りを勧め、それを越度に言ひ立て、われくが手段の如く致すべく候ふ。」宛て名は「大藏殿へ、御存じより。」此一通。

大藏 それを。(ト懸るを見事に投げ、大學立ち上がるを、兵庫之助とめる。ちやつと下にゐる。)

内膳 若殿を蔑ろにするは一物有る。身が弟とて用捨はない。但しく、し上げて同類を白状させうか。

大藏 サア、それは、

兩人 サア／＼／＼。〔ト詰めよる。大藏かゝる。其の儘蹴倒し、リウ／＼と背打ちに打ち据ゑる。〕

内膳 身が弟ゆゑ、人も恐れて敬ふを、よい事にして附け上がり、若殿に奢りを勧める人非人め。動いた
ら眞二つぢやぞ。〔ト振り上げる。〕ハイト下にゐる。何と、お上使様。大學様。若殿の放埒は、弟
大藏めが勧め。元を糺し、未納まれば、若殿は放埒ではござりませぬ。

大學 イヤ、其儀は。

内膳 但し弟めを吟味致さうか。

大學 イヤ、明白な大藏が科。陸次郎に科はない。

内膳 然らば弟めは、……兵治、軍内、こいつが大小もぎ取り、阿呆拂ひに致せ。

兵庫 イヤ、其儀は。

内膳 身共が言ひ附け、苦しうない。

源吾 アイヤ、内膳殿、大藏の一旦の越度なれば、篤と諫言の加へ、過つて改むると、元の通りに、ナ、
若殿様。

陸次 ツ、そうぢや、大藏が勧めでも、モ、元より、ソ、某が、オ、愚かから。

尾上 ほんに殿様のお氣に入りの大藏様。悪いとはいひながら、もう堪忍してあげなされて、矢ッ張り、
お側になア。

内膳 イヤ、こいつを若殿のお側に置くは、野良猫をなづけるやうなもの。仇こそ致せ、恩は知りませ
ぬ。殊に、兄弟の縁あれば、拙者が潔白。兩人の者、下部しもべに言ひ附け、こいつを叩き出せ。

兵庫 すりや、どうあつても大藏様を。

内膳 用捨致すと、爲にならぬぞ。〔ト兩人氣味わるさうに大藏が側へ行つて大小を取る。大藏いろ／＼。軍内
こは／＼大藏が顔を見て〕

軍内 家來共。大藏を早く門前へ叩き出せ。

侍ひ ハア。〔ト皆々割竹を持ち出て〕サア、立たッしやれ。

ト大藏不請々々に立上がり、大學の方へこなしあり。内膳を見て、

大藏 何の事ぢや。とう／＼壺をかぶつたはおれ一人。

侍ひ こま言はずとござれ。

大藏 ハテ、行くわいやい。

軍内 きり／＼ござれ。〔トしが／＼あつて、つぶやき／＼追ひ立てられ、向うへ入る。〕

兵庫 政道に私しなき内膳が計らひ、驚き入つた。此上は二品の重寶。

内膳 ハツ、若殿、二品の重寶を、

陸次 ムウ。(ト陸次郎入る。)

源吾 廊の者共は尾上を伴ひ、早く立歸れ。

陸花 アイノ。申し、尾上様を送つて來たれば、もうわたしらは去なうわいなア。

此浦 サア、尾上さん、お前も一しよに、

皆々 サア、ござんせいなア。

尾上 そんならわたしも。(ト立つ。)

内膳 イヤ、尾上。そらにはまだ用事あれば、矢ッ張り是れに。

尾上 アイ。(ト下にゐる。)

軍内 大夫共、尾上殿は是れに置いて、そち達は早く廊へ歸れ。

陸花 アイノ。そんなら尾上さん、先さへ去ぬるぞえ。

ト陸花、此浦、子供、しかくありて橋懸りへ入る。ト陸次郎奥より寶の箱二つ持ち出し、正面に直す。修理倅、一二色の重寶持參致したか。

陸次 ハツ。

修理 赤松家より傳はりし園城寺の花瓶、東雲の香爐、改めてお上使様へ。

陸次 ハツ。(ト紐をとぎ、蓋を取り、内に寶はないゆゑ悔りする。)

源吾 若殿、なんとなされました。

陸次 コ、此内に、フ、二色ともに。(ト箱を見せる。此時書いた物落ると、皆々驚く。)

皆々 ヤア、すりや、二色の寶は、

修理 紛失致したか。

陸次 ハツ。(ト當惑。尾上心遣ひ、大學せいら笑ひ)

大學 ハ、ハ、ハ。なんぼ内膳がいひくるめても、どうて陸次郎は繩目の恥。

ト嘲哂する。内膳委細構はずぬる。源吾こなしあつて

源吾 何にもせよ、大切の寶紛失とは。(ト立寄りながら、落ちたる書き物を取り上げ)箱の内より落ち散り

し此書き物。(ト開く。)

修理 源吾、詮議の手が、り、早く読み上げい。

源吾 ハツ、コ一つ契情尾上、其方様へ金子七百兩にて身請け(ト讀み、驚き、又一通を開き。コ)覚え、一つ、

尾上揚げ代、雜用、諸々の用金千八百兩、(ト書き、止める。)

軍内 源吾殿、大切な詮議の手が、り、

兵治 なぜお読みなされぬ。

源吾 サア、これは。

修理 源吾、なぜ読み上げぬ。早く読み上げい。(ト大學立ちかゝり)

大學 讀まれずば、身共が (ト引き取る。)

源吾 アイヤ、それは

大學 詮議の手が、り、控へてゐい。

源吾 ハツ。(トうつむく。)

大學 何ぢや。「契情尾上、其方殿へ金子七百兩にて身請け致させ候ふ處實正なり。右の金子請取候ふ上は

尾上儀は其許心任せになさるべく候、尾上親方、金子や才兵衛、月日。」宛て名。「桃の井陸次郎様。」

ト皆々驚く。又一通開き

「覚え、一つ。尾上揚げ代、雜用、諸の用金子千八百兩儘かに請取申し候ふ。是れも宛て名は、「桃の井

陸次郎様。」こりや契情の揚げ代と身請けの一札。桃の井家の重寶園城寺の花瓶、東雲の香爐とは是

れでござるか。桃の井修理太夫殿。

ト修理太夫立つて陸次郎を引きつけ

修理 ヤイ、倅、是まで病身者といたはり置いたれど、かゝる場所では用捨はならぬ。サア、書き物が

どうして寶の箱の内に有つた。サア、言ひ譯せよく。言ひ譯なければ桃の井家の大事。

源吾 申し、若殿、此證文がどうして箱の内より出ました。仔細をちやつと仰せ上げられい。

尾上 申し、殿様、申し譯がござんすかないア。早う様子を仰しやつて下さんせいなア。

軍兵 若殿、どうてござるな。

大學 陸次郎、なんと。

ト陸次郎よう物いはず、うろくして、右の書いた物を持って内膳の側へ行て、膝を叩き、いろくあり、

もがきて

陸次 コ、これ (ト書き附けを見せて) ナ、内膳、コ、コレ。

トいろくあせつても内膳きよるりとしてゐる。皆々こなしあつて

修理 印南内膳。事を計る其方が、おし黙つてゐては濟まぬ。早う寶の詮議を致せ。

源吾 これさ、内膳殿、大殿の御意といひ、若殿の御難儀、黙つてござつては

軍内 此場が済みませぬ。

兵治 内膳殿、どうてござる。(ト矢張り構はず黙つてゐる。陸次郎始終こなしある。)

陸次 コ、コレ内膳、コ、此(トばつかりいうてゐる。尾上は内膳に取り付き)

尾上 申し、内膳様、わたしが身請け證文や、あの書き附けが箱の内に有つたゆゑ、殿様の御難儀。ちやつと申し譯をして、下さんせいなア〜。

皆々 御家老、どうてござる。

陸次 ナ、内膳、コ、この、カ、書き附けが、タ、寶の箱の、ウ、内にあつたは

内膳 知りませぬ。

陸尾 エ、。

内膳 イヤサ、此内膳、若殿の儀、随分申し譯を致さうと存じても、こればかりは富妻那の辯ても叶ひませぬ。わるい事といふものは、どうも包まれぬ。好事門を出でず、悪事千里。若殿、二色の寶を賣り拂ひ、傾城を請け出したり、廓のほたえにそれた事顯はれしは是れ天命。拙者がお主の事、どうぞと存じても、此儀ばかりは、何共はや。

陸次 イ、い、や、ク、廓、カ、通ひも、太夫を、ミ、身請けも、ソ、そちが〜。

内膳 何を言はッしやる。若殿。どうてござる。とツくりと仰しやれ。あやちが聞こえませぬ。

ト陸次郎だん〜取りのほす程、物よう言へぬこなし。

陸次 サ、さしづぢや。(トあせる。尾上見られて)

尾上 さうてござんす。揚げ代も拂ひの事も、わたしが身請けも、内膳様、みんなお前が

内膳 これさ、傾城。身共がそちを身請けしたらば、證文の宛て名に印南内膳とある筈。是れには桃の

井陸次郎様、ナ、陸次郎とナ。(ト指にて教へ)ぢやによつて、身共は知らぬ。

修理 すりや、内膳、其方は

運番 其證文請取りの事は

軍兵 御存じござらぬかな。

内膳 つゆいさゝか、存じませぬ。

ト空囃きゐる。陸次郎「エ」と思つても、よう言はず。是れよりウ〜とばかり氣をせて修理太夫が側へ行て辭儀したり、兵庫之介の側へ至りて内膳を教へ、拜んだり、いろ〜ありて、内膳が側へ行て心を静め、物言はうと思ひ、胸を撫ておるしても、取りのほしてゐる體。是れを始終尾上附いて歩いて介抱する事さま〜ある。陸次郎ぐつと唾を呑み込み、氣を落ちつけ

陸次 内膳。

内膳 何でござる。(ト冠せていふ。又顛倒して)

陸次 ツ、そちに、ア、預けたく

内膳 何ぢや。

陸次 ア、預けた

内膳 狎かなんぞのやうに、何を預けた。

陸次 コ、このしよ〜〜

内膳 しよ〜〜とは何事ぢや。コレサ、其やうに腕かずと、心を落ち附けて、あれはかうぢや、これはかうしてと、一つ〜合點の行くやうに、つまびらかに言はつしやれ。承らう。

陸次 サ、ソ、そちが

内膳 ア、拙者が

陸次 オ、おれは

内膳 こなたに(トだん〜耳をつけて行く。)

陸次 ソ、それならナ

内膳 何ぢや。

陸次 エ、いふには、

内膳 おかつしやれ。こなたの言ふ事聞いてるれば、いつまでか、らうやら知れぬ。コレ、若殿。かうか。

こなたが身持ち放埒で、寶を賣り拂ひ、傾城の身請けをしては、お上使様や大殿のまへ、どうも言ひ譯がないゆゑ、その科を身共に引き請けてくれい、と言はつしやるのか。さうか〜。

ト陸次郎、此うちさま〜口惜しがり、拳を振り、内膳が顔をきつと見て、からだを慄はしてゐる。

うなづかつしやるは、さうか。さう事を分けてなら、なぜとくにも拙者に密かにいいておかつしやれぬ。かういふ場所になつて、主従のよしみぢやというて、かうあからさまに顯はれては、各が御存じ、猶こなたに憎しみがかる。(ト陸次郎鬢の毛をむしり、口かきむしつて口惜しがり泣く。)

源吾 申し、若殿、内膳殿に仰せらるゝは、お身の言ひ譯の筋でござりませう。

尾上 サア、さうでござんせうけれど、氣を取りのぼして、猶よう物仰しやらぬによつて、こりやマアどうぞ仕様はござんせぬかいなア。

陸次 ぢやというて、これがどうも、(ト陸次郎「もう」と立つを尾上、源吾とめる。)

兵庫 うろたへたか、一家中。寶の紛失、陸次郎が言ひ譯、内膳と對談と見ゆれど、何をいっても言舌

露知らさず隠してゐたわいなア。(ト是れを聞いて陸次郎、猶腹立ち、尾上を引き退け、突ツカゝつて
陸次 ン、そちや(ト尾上を指さし、内膳が胸ぐらを取る。内膳突き飛ばす。尾上、陸次郎を介抱して)

尾上 サアくく、道理でござんす。が、マアくわたしに云はして下さんせ。(ト陸次郎をなだ
め、内膳の側へ行き)コレ、それにナア、今日も今日とて此文を(ト出し)アレ、あの軍内殿に言ひ
附けさしやんしたぢやないかいなア。(ト内膳罷撫てゐる。)憎さも憎し。申し、源吾様、此文をお
上使様や、大殿様、皆様の前で、大きな聲で讀んで下さんせいなア。(ト源吾に渡す。源吾取つて、
なしあつて開き)

源吾 讀まいでならうか。どなたもお聞きなされて下さりませう。御覽も御面倒ながら、又々文して申し
上げり、誠に是れまで拙き水莖にて心のたけを言はせりへども、何の御返事もないのは、餘り
つれなく、勤めの御身には情けといふ事はないものに候ふ、但外の風に靡かぬは桃の井といふ手
活けの花有るゆゑとあきらめ、ふツつりと思ひ切らうと存じて、たゞ面影の忘れず、起きては
現、寢ては夢、しんに(?)思ひに沈む程、せめて私しが切なる心、露程も思し召し下され候は
二度とは言はず、たつた一度の逢ふ瀬、神かけて願ひ入り、どうぞく此御返事、松に時雨の
濡れて乾かぬ涙の袖の朽ちぬ間に判み上げり、目出度かしく、名は高砂の尾上の君様参る、忘る

る、ひまも内膳より。……ハテ、御家老に似合はぬ此文。

兵治 内膳様が尾上殿へ、あ、いふ文を附けさつしやるとは、思ひがけない儀でござる。

尾上 なんと、あの文體かな證據、戀ひの意趣で殿様を、科に取つて落す企みてござんせうがの。

陸次 ア、あのフ、文で、おのれがコ、心が、み、皆知れた。

源吾 忠義と見せる不忠の内膳。あの狀が有るゆゑ。

修理 實は内膳、お身が盗んだか。

内膳 馬鹿盡すな、毛二才め。あの如く尾上に、狀を附けたは、うッ惚れたゆゑ。實の事は身共は知ら

ぬぞ。かうばれた上は、コレサ、吃り殿。

陸次 エ、。

内膳 契情の尾上を身共に下され。女房に持つて抱いて寝る。

尾上 エ、憎てらしい。まだそんな事をいふかいやい。

内膳 尾上、是れ程に思つてゐる身共、餘り憎うもあるまいがな。

尾上 エ、こなたはなう。(ト内膳を覗む。)

内膳 若君のたはけが現ぬかした筈でもある。美しい者ぢやなア。

源吾 此酒座にて、家老の身にて、面目ないとも思はず、

内膳 戀ひは曲者、平日發明な身共なれども、思案の外ぢや。サア若殿、是非尾上は拙者申し請けましたぞや。

陸次 ジ、重々のリヨ、慮外、オ、おのれ。

ト此うち陸次郎いろく身をあせり、無念、口惜しい思ひ入れありて、きつと立上がり、
ト脇差した抜き切つて懸る。内膳すり抜ける。逃がさぬとせき切つて刀もしどろに立廻り、皆々立騒ぎとめる。振切る。いろく宜しくあつて、ト源吾、尾上抱きとめ

源吾 マアく、若殿。こりや御短慮。

尾上 尤もてござんすけれど、マア、待つて下さんせ。

陸次 ム、シ、(トかぶり振つて氣をもみあせる。)

修理 小姓共、藥湯をもて。ソレ、氣を靜めさせい。

皆々 先づく。

ト皆々とめる。陸次郎矢張り身を揉む。尾上は思ひ入れあつて、手水鉢の水を柄杓にてすくひ飲ませる
尾上 マアく、これを。(ト陸次郎腹立ち紛れにくつと飲み、直ぐに血を吐き、いろくに苦しみ「ワン」と悶絶。)

源吾 ヤア、こりや若殿様が

尾上 氣を揉ましやんしたか、血汐を吐いて

修理 ナニ、仲は相果てたか。

皆々 ヤア。

ト皆々立騒ぎ、驚く。内膳衣紋を直し、修理大夫を元の二重へ抱ふ、軍内、兵治、源吾を引き退け、印籠より藥を出し、嚙味して陸次郎に飲ませ、兵庫之介、大學が前へ手を突き

内膳 御兩所、全く御上意の趣き。二色の寶も差し上げ、若殿陸次郎殿、今宵出潮に乗船仕り、東山義政公へお目見え致させませう。

修理 内膳、なんと。

内膳 拙者が配劑、若殿の吃りは、全快致させますとござりませう。

兵庫 ムウ、すりや、内膳。陸次郎儀を

内膳 産まれついたり吃り。大殿のお歎き、一家中の外聞と申し、何卒御本腹と醫療手を盡せども、空しく心を盡す折から、吃りを直す幸ひの秘藥として臍をもませ、連上させ、此藥を與ふれば、忽ち本腹と名醫の傳へは、お上使の趣き、お目見えの儀取急がん爲、あれなる手水鉢へ掛け樋より

藥を仕掛け置き、拙者が計らひにて、若殿に御立腹させ、藥を與へて本腹させん爲、右の仕儀修理すりや、俵が吃りを直し

内膳 御上洛させん爲に

軍兵 こなた様の悪事のだんく。

大學 すりや、内膳は

内膳 悪と見せたも若殿は、藥を用ゆる拙者が配劑。

尾上 そんなら、わたしに

内膳 誠に戀慕でよいものか。若殿にお氣を揉まさん爲。

尾上 さやうとも存じませず、最前から

兩人 雑言過言、

皆々 眞平御免下されませう。(ト此時、陸次郎むくくと起き上がり、内膳を見てきつとなり)

陸次 おのれ、内膳、ようも此陸次郎に色を勧め、忠臣顔にて太夫が身請けまでさして、其證文を寶の箱の中に

ト應るを尾上、源吾とめて

源吾 申し、若殿様、内膳の悪事は、皆あなたのお爲でござりまする。

尾上 申し、早まらずと、とつくりと、様子をお聞きなされませいなア。

陸次 イ、ヤ、尾上、そなたに横戀慕をいひ、今の状を見ては、もうくくく、どうもこたへられぬ。

ト皆々此うち陸次郎がせりふに心附きて

皆々 ヤアく、若殿様は言舌が分りまする。

尾上 申し、お前の吃りが直りましたわいなア。

陸次 何をいふ、尾上。おれが物が自由にいはれるなら、あの内膳に一部始終を詰めひらきして

尾上 ソレく、其やうに吃らずと物仰しやるは、

陸次 ヤアく、尾上。(ト思ひ入れありて) 誠に、おりや舌もつまらず、心の儘にいはれるは。親人様。

お上使様。太夫。源吾。軍内。兵治。それにあるは内膳。ヤアく、ホウ。(トいろくありて、大きに呆れ) こりやどうぢや。

内膳 若殿、こなた様の吃りを直さんと、勿體ない、御主人に向つて、悪口雑言も、心氣を揉ませ、秘藥を與へ、本腹致させん爲でござります。

陸次 そんなら太夫に惚れた事も、寶の箱へ證文を入れて置いたも、おれに心を揉ませ、吃りを直さん

内膳が計らひてあつたか。

尾上 さうでござりますわいなア。

陸次 エ、忝い内膳。よう腹立たさしてたもつたなう。

修理 伴が吃りは内膳が計らひにて本腹すれば、すぐに義政公へお目見え。

大學 シテ、二色の重寶請け取りませうか。

陸次 其儀は私し持参にて、お上使を御供、乗船。

大學 然らば陸次郎、われくと同道にて

源吾 アイヤ、若殿御乗船の用意の間、お上使様には、暫く奥の間で御休息を。大殿様。

修理 いかにも。イザ、御兩所様。

大學 成る程。最前からいろくの事を見物して、ほつと退屈。奥へ行て休息仕らう。サア、兵庫之介殿。

兵庫 御尤も。(ト立上がる。)

内膳 アイヤ、兵庫之介様。憚りながら、拙者がお願ひの儀が

兵庫 ムウ、内膳、身共にそちが願ひとは、

内膳 その儀はひそかに

大學 しからば身共も此席にて

兵庫 アイヤ、貴殿は矢ッ張り御休息。

内膳 苦殿様、大學様を奥にて御饗應。

陸次 いかにも、内膳。(トこなしあつて)アノ、そなたの願ひはなんぞ

内膳 お氣遣ひな儀ではござりませぬ。まづ。

陸次 そんなら、親人様。

修理 大學殿。

皆々 まづ、お入り遊ばされませう。

ト唄になり、右一件皆々奥へ入る。あとに兵庫之介、内膳残る。兩人思ひ入れ。

兵庫 内膳、ひそかに身共へそちが願ひとは。

内膳 ハッ。大殿とは御兄弟の儀、近しき御家門の兵庫之介様、拙者が切腹 憚りながら、御檢分下さりませう。

兵庫 ムウ、内膳。すりや二色の重寶は紛失したか。

内膳 ぢやによつて、申し譯に拙者が(ト腹切らうとする。)

兵庫 待て、内膳、生は難し、死は易しと、萬端思慮有る其方、切腹とは兵庫之介に日延べの願ひか。
内膳 夫れ園城寺の花瓶は、大塔の宮、軍中の徒然に、手づから竹束をもつて刻し給ひし名器。まつた東
雲の香爐は、明け方に鶏鳴を告ぐる、世に稀なる二色の重寶。赤松圓心申し請け則祐に傳はり、
孫の四郎則宗謀叛のきざみ、當家の先祖桃の井播磨守、討ち取りし功によつて、今桃の井家に賣と
す。此たび二色ともに紛失は、赤松の餘類か、但し此國を望む族と存じ、草を分けて詮議の方便も
あれど、今日過急の御上意ゆゑ。

兵庫 ムウ。シテ、寶の預り主は。

内膳 多治見藏人。其場にて討たれ、相果てました。

兵庫 すりや、其儀を修理太夫一家中も。

内膳 深く隠して詮議の評議は、此内膳と、相役主水只二人。

兵庫 サ、そち達が心を合せば、追ッ附け寶は知れるであらう。

内膳 それゆゑ拙者切腹致し、御家門のよしみ、あなた様に日延べをお願い。あとにて寶の詮議は古佐
壁主水に。

兵庫 國の柱の兩家老、立別れたるは則ち鳥居の如く、桃の井といふ額あつて笠木を守る忠臣の印南内膳

古佐壁兩人の、何れが朽ち倒れても笠木の額の破損。一本の柱では、よもや鳥居は立つまいぞよ。

内膳 ぢやと申して、日延べの儀を

兵庫 現在の弟を追放し、陸次郎が吃りを直す方便といひ、そちが忠臣を感じ、日延べの儀は兵庫之介
取りなし致してくれう。

内膳 すりや、日延べの儀を

兵庫 ハテ、陸次郎目見えの上は、寶は追つて

内膳 あなたのお情け、

兵庫 そちも無事で、

内膳 時日移さず、寶の詮議仕ります。

兵庫 それが肝要。

内膳 返すくも

兵庫 生田兵庫之介、刀にかけて。氣遣ひ致すな。

内膳 エ、有り難うござります。

兵庫 彼れといひ、是れといひ、ハテ、天晴れな。(ト風ひ入れあつてこなし。)内膳、後に。

ト唄になり、兵庫之介奥へ入る。内膳一人残る。ト橋懸りより侍ひ大勢出て、奥より軍内、兵治出る。皆々内膳様。

内膳 コリヤ。そち達はかねて言ひ附け置いたる通り、大殿のお歸り、身共が乗物にて、合點か。

皆々 ハツ。(ト軍内、兵治皆々向うへ急ぎ入る。と内膳こなしあつて)

内膳 是て大方、萬事の首尾。(ト思ひ入れある。所へ奥より源吾出て)

源吾 内膳殿、お上使様には若殿支度の間、旅館に相待つとあつて、最早御兩所共、お立ちてござりまする。

内膳 すりや、御兩所には、もはや、お立ちか。

源吾 わけて兵庫之介様、二色の寶の儀は、あとより内膳持參との仰せてござります。

内膳 シテ、若殿の御出船。大殿には、

源吾 若殿の御出船は今宵、戌の上刻。又大殿には御兩所を路次まで、お見送り。

内膳 ハテ、御老體の御苦勞。お供は心元ない。其方はあとより追ッ付き召され。

源吾 シテ、又、こなた様には、

内膳 萬事の指圖後かまはずと、早く〜。

源吾 ハツ。(ト源吾橋懸りへ走り入る。)

内膳 へ、へ、へ、うまい〜。

ト唄になり、内膳こなし有つて向うへ走り入る。ツヤン〜と、幕六つの半鐘打つ。小姓燭臺を持って出て、すぐに入る。と奥より尾上、廣蓋に陸次郎が上下持つて出る。陸次郎あとより

尾上 申し、殿さん、爰て着なますかいなア。

陸次 コレイナウ、さつきにからもいふ通り、物のいひやうを直しやいなう。

尾上 アイ〜。サア、早う着なませいなア〜。

陸次 アレ、又いなう。おれは今迄舌がとほらぬゆる部屋住みなれど、此やうに本腹すれば、義政公へお目見えすれば、おれは國の守。其時は、そなたはお部屋様。何もかも直さにやならぬぞや。

尾上 それでもちひさい時からいひ附けた癖ぢや。どうもならぬわいなア。こりや一體、お前がわるいわいなア。

陸次 どうしておれがわるい。

尾上 さういふ事なら、なぜとうから教へて下さんせぬぞいなア。

陸次 何をいやるぞいの。今までは吃りて、人の事ぢやない、おれが物いふのさへぎち〜する。人の

事どころかいなう。

尾上 ほんにさうぢやあつたなア。

陸次 ア、今までおれがよう物いはぬさかいて、心得ぬ事共がたんとあつたわいの。

尾上 こりや聞かねばならぬわいな。わたしは何にも覚えはないわいなア。それに何が合點のいかぬ事があるえ。

陸次 あるかないか、わが心に問へやい。……こんな事がいへなんだわい。

尾上 何をいはしやんすぞいなア。

陸次 ソレ、去年の年越しに、禿共が、太夫様の豆はわたしが讀んで上げるといふたれば、わが身がいやるは、こつちへおこしやといやつた。

尾上 そりや何ぢやわいなア。

陸次 口舌せうならこゝらぢやわい。何ぢや、わりやをかしい事するな。なぜにおれにかくすのぢやといはんらんとこぢや。

尾上 サア、ありや勤めする身ぢやさかい。

陸次 なんぼう勤めしてもおれには其時見せにやならぬ。……ア、合點のいかぬといひたうても

ぎつちくしていはれはせず、傍に硯が有つて、書いてやつた發句が、あるが覚えてゐるか。

尾上 アイ、よう覚えてゐるわいなア。

陸次 なんの、忘れたぢやあらう。

尾上 イエ、よう覚えてゐたわいなア。(トこなしある。)オ、それく。節分の夜は袖よりもおのが年といふのぢやないかいなア。

陸次 其時、おれに見せんならんわい。

尾上 イエ、ありや人に見せぬものぢやといなア。

陸次 人に見せぬ豆は、こればかりぢや。

尾上 何をいはしやんすぞいなア。サア、早う上下を着なませぬかいなア。

陸次 アレ、まだなませ、といやるかいの。是れからは今までの物のいひやうも直さにやらぬ。歩きやうもふなくとあるかすと、コレ、(ト廣差を持ち)此やうな物でも、かう持つて、うやくしう(ト歩いて見せ)かう直して、かう手をつかひ、サア、御前様、まづ上下をお召し替へなされませうといふのぢや。

尾上 ア、さういふのかえ。

陸次 サア、やつて見や〜。

尾上 アイ〜。(ト廣蓋を持ち、陸次郎がするやうにして)御前様、先づ上下をお召し替へなされませう。

陸次 されば、はや、ハ、ハ、ハ、ハ。とんと寒聲ぢや。

尾上 何をあほらしい。早う着なませいなア。

陸次 アレ、またいの。

尾上 ほんになア。

陸次 ア、うさんな奥様ぢや。(ト此内、尾上下を持つてくる陸次郎見て)これは下というて、あとから穿

く物ぢや。ソレ、そちらをおこしや。

尾上 これかえ。(ト上を着せる。下を取つて来てはかす。)

陸次 コレ〜、其山形の物を後ろの縫じ目へあてや。さうしてから其紐をもつて、後ろからだきつきや

尾上 アイ〜、かうかえ。(ト後ろより紐を持ち抱き附く。陸次郎とつくりと上下を着て)

陸次 ア、どうやら、かうやら、上下は着た。

尾上 ほんに、ようしたものでぢや。

陸次 ドレ〜、其提げ物。

尾上 アイ〜。(トほつてやる。陸次郎呆れて)

陸次 嗜みや。是れも斯う持つて恭々しう渡すものでぢや。それに、ソレ、と打ちつけ、何のまねぢや。

嗜みや。

ト此うち陸次郎腹の痛むこなしあつて

アイタ、ハ、ハ。(ト苦しむ。)

尾上 何とさしやんした。癪が起つたかえ。(ト陸次郎こなしあつて)

陸次 イヤ、もうえい〜。(トこなし有る。橋懸りより源吾走り出て)

源吾 若殿様、これにござりまするか。

陸次 源吾、あわた〜しい。何事ぢや。

源吾 ハツ、先達て大殿様、お上使様を、お見送りありて歸るさ、狼籍者^{あまた}數多をり合ひ、お乗り物を目がけ切つて懸る。某も大殿大事と働かうち、印南内膳お出であつて、狼籍者を皆切り散らし、大殿にもお怪我なく、中屋敷へお歸りとあるゆゑ、内膳様のお指圖にて、又もや道にて怪我あつてはと、内膳様のお乗り物へ大殿様を移し、お供廻りも内膳殿の御家來にて、只今中屋敷へお入りて

お入りませう。

陸次 ムウ。すりや、親人は、お怪我なう中屋敷へ。

源吾 ハツ、拙者もお供。心が急ぎますれば最早是れより。(トいひ捨て走り入る。)

尾上 申し、お聞きなされましたか。大殿様にお怪我はないといなア。

陸次 サア、内膳がお供に附けば、氣遣ひない。(ト又此うち痛むこなし) アイタ、い、い。

尾上 又痛むかえ。今の知らせて、ハツと思はしやんしたによつて、瘡が起つたのかいなア。

陸次 アイタ、い、い。けしからぬ。つひに此やうな事は覚えぬが。

尾上 きつう痛むなら、藥取つてこつかえ。待つてゐやしやんせ。(ト奥へ行かうとする。)

陸次 ア、コレ。藥よりは今の知らせといひ、どうやら胸さわぎがして。……………古佐壁主水は

會根の社へ代參。内膳は親人のお供。コレ、主水を迎ひ。

尾上 アイ、い、畏りました。(ト尾上奥へ走り入る。陸次耶だんく苦しがり、思ひ入れあつて、手拭ひにて腹

を巻いているく苦しむ。向うより古佐壁主水走り出て)

主水 若殿様、委細は道にて承りました。急病の御様子、御容態は如何でござります。

尾上 主水、待ちかねた。五體惱亂して(ト反る。主水こなしあつて)

主水 まづ、脈體を(ト膝に抱へ、兩方の脈を取つて吃度なり) 眼中よどみて、脈もしどろ。こりや正し

く毒藥。……………若殿、何ぞ思ひ當りはござりませぬか。(ト陸次耶苦しみながら)

陸次 最前、内膳が、某が吃りを直さんと秘藥を與へしが

主水 誠に、言舌も分りますは。シテ、秘藥とは。

陸次 某に知らさぬやうに、心氣をもませ、逆上させて、用ひた藥は、懸け樋よりあの手水鉢へ。

主水 ムウ、此手水鉢。

トつかく行て、杓にてすくひ、萬年草にかけり。萬年草はつたりと萎れる。主水思ひ入れありて

さてこそ毒藥。すりや、良藥というて、内膳が用ひたは、

陸次 ヤア、い、さては内膳がたばかつて毒藥を

主水 シテ、内膳は

陸次 親人の供にて、中屋敷へ

主水 差當る若殿の敵。印南内膳。(ト駆け出ようとして)

尾上 ぢやというて、若殿の此有様。(ト尾上出て、陸次耶に取り付きこなし。)

陸次 こりや主水、こ、構はずと内膳めを。

主水 ハツ。(ト思ひ入れあつて) さうぢや。(ト股立ち取つて、向うへ走り入る。)

尾上 殿様、ちつとようござんすかえノ。

陸次 尾上、最前、内膳が薬というて與へたは、ありや、毒ぢやといやい。

尾上 エ、。(ト胸りして) 内膳様は何として、毒を上げさしやんしたぞいなア。

陸次 サア、今果つるとも、人に包みし二人が中の俵をもち立て、某が敵内膳めをどうぞ。

尾上 エ、そんなら、あなたは

陸次 必ずあとに存へ、俵が事を頼むぞよ。

トいひ、様々苦しみ、こなしある。尾上もいろ／＼ある。陸次耶兩手を合せ、ばつたり落ち入る。尾

上は取り付き

尾上 ハア。(ト大泣きに落すがチヨンノ。)

返し

返しは黒幕切つて落すなり。

造り物一面の土手板。松、稻村二つあり。道具とまると、臈病口より供廻り大勢、内膳が定紋の箱提灯にて乗り物をかき、此侍ひは皆々中通り、軍内、兵治も附き添ひ、源吾供にて出て来る。ト向うより主水、片鎌鎧を持ちて走り出て、きつと見て

主水 主殺しの印南内膳、覺悟。(ト提灯をばた／＼切つて落し、右の鎧にて乗り物ごしに突く。)

源吾 狼籍者。

ト右の鎧を切り折る。そりやと聲かけると、是れより主水少し立廻りありて、家來皆々を追ひ込み、橋懸りへ入る。源吾乗り物の戸を開き見る。修理太夫鎧にて突かれ、死んでゐる。

ヤア、こりや大殿はことは切れたか。何にもせよ。(ト右の鎧の穗を引きぬき) 身共は曲者を詮議。

お死骸は是よりすぐに、お上屋敷へ。

家來 ハア、。

ト乗り物をかき上げ、花道へ入る。源吾、右の穗先を持ちて橋懸りへ走り入る。ト是よりばた／＼にて主水、大童の形にて出て、爰にて中通り皆々を相手に烈しき大タテさま／＼ありて、宜しく皆々を切つて捨てキツト見得になる。ト向うにて本鐵砲の音ホーンとする。ウンと主水倒れ、死ぬる。とすぐに吹きかへ出す。と向うより久住新平、野袴にて提灯持たせ、家來をつれ、出て来る。と橋懸りより源吾走り出て

源吾 ヤア、生田兵庫之介様の御家來、久住新平殿。

新平 源吾殿、お館の騒動の様子、氣遣はしく、御主人兵庫様のお指圖、駈け附けましたが、様子はど
うてゐる。

源吾 ハツ。大殿、お乗り物にて、お上屋敷へ歸るさ、此ところに於て突きとめし曲者、即ち御最期は此穗先き。

ト渡す。新平取つて

新平 何にもせよ、詮議の手が、り。あかし。

源吾 ハツ。(ト家來が持つてゐる提灯差し出す。)

新平 こりやコレ、古佐壁主水が所持の片鎌鎧。

源吾 ムウ。すりや大殿を突きとめしが、古佐壁主水。(ト行かうとする。)

新平 待つた。古佐壁主水は、主人へひそかに願ひの筋もあれば、何にもせよ、事の實否。

源吾 ぢやと申して。

新平 桃の井のお家の断絶、

源吾 エ、。

新平 萬事は主人へ。何にもせよ、中屋敷へ參つて陸次郎様御最期の様子、見届けたる上。源吾殿、こ

ざれ

源吾 ハツ。

ト新平、源吾、家來皆々橋懸りへ走り入る。ト少し凄き合ひ方になると、向うより内膳、頭巾忍び姿にて、種ヶ島を持ち出て、主水の死骸を見て、片頬にて笑ひ

内膳 へ、へ、へ。ホ、ホ、ホ。家老の忠臣立てする古佐壁主水でも、此種ヶ島にたつた一撃ち。もろい最期は手便の毒藥。大殿は主水に殺さず。こつちの拍子はうまい手つがひ。盗み取つたる園城寺の花糊を、東山へ差し上げ、大殿の所持した此龍の印を以て身方を集め、修理の太夫が妾腹の伴八重菊丸を玉に使うて、桃の井の家國は身共が押領する。主水、草葉の蔭から悦ぶであらう。

ト主水の死骸を踏みにじり、いろ／＼有りて種ヶ島を捨て、こなしあつて、橋が、りへ悠々と入る。トマタ／＼にて、軍内、兵治、尾上を引ッぱり出て

尾上 殿さんの御最期、驚いたる體もなく、こりやわしをどうしやる。

軍内 ハテ、知れた事、惚れてござる内膳様へ連れていつて、褒美を貰ふ。

尾上 そんなら、そら達も内膳に

兵治 どうからお身方。今日の此仕儀も、先達てより内膳様の計らひぢや。

尾上 エ、口惜しい。さういふ事を露ほども知つたならば、殿さんに御最期も有るまい。エ、残り多いわい。

軍内 こま言いはすと、立たう。

兵治 サア、うせう。

尾上 エ、いやぢやく。

ト是れより尾上いやがるを兩人連れて行かうとする。少し立廻り、よろしくとまると、近藤平次兵衛、

娘お辰走り出て

お辰 ヤア、妹。

平次 娘。(ト兵治、軍内兩人を引き廻し、立廻り)

尾上 申し、と、さん、若殿様は。

平次 お果てなされて館の騒動、道にて聞いて、取つて返したも

お辰 そなたの身の上心元なさ。

軍兵 うぬ。(ト軍内、平次兵衛、兵治、お辰立廻りあつて)

平次 シテ、心元ないは古佐壁主水。

お辰 かゝる騒動に何してござるぞ。

尾上 サア、主水様は内膳を殿様の敵と追ひかけさしやんしたが

軍内 邪魔する老いばれ。

兵治 此女め。

ト切つて懸るを、兩人又よろしく立廻りある、一トかせ切る。此うち尾上、主水が死骸を見附け

尾上 ヤア、こりや主水様も、お果てなされてござるわいなア。

お辰 ヤア。(ト驚き、平次兵衛、お辰取り付き)

平次 ヤア、こりや、誠に主水殿が死骸。

お辰 そんなら、言ひ號けの主水様も、お果てなされたかいなア。

尾上 頼みに思ふ御家老の

平次 掣の主水も相果て、いよく井の

三人 お家は断絶。(ト三人顔見合せ、「ハア」と死骸に取り付き泣き落す。少しどろくにて主水むくと起き

主水 平次兵衛殿、言ひ號けの女房、傾城尾上。

尾上 エ、そんなら、お前は

平次 主水、こなたは

主水 忠義に凝つたる心は金藏。

ぬぞ。

大學 サ、それは（ト思ひ入れあつて）何てござる。オ、サ、とくにも見届けうとは存じたれども、腰抜け武士の桃の井が缺所城、みだりに見分致すも、お上へ恐れと存じての儀でござる。

十内 すりや、東山殿への恐れを思し召してか。

大學 さやう〜。

十内 ハ、ハ、ハ、。そりやいらざる御遠慮。當所の百姓ども、はる〜都へ訴訟致すまでもない。當所に御支配なさる、こそ幸ひ、とくと糺すがお役目。餘所に聞き捨て置かる、は、こりや、ちつと御卑怯と存じまするか。

大學 何サ〜。妖怪變化はおろか、鬼神なりとも恐る、儀はござらねども、お指圖もなきに差し出がましく存ずるゆゑ。今日只今、御上聞に達せし上は、誰れ憚りもござらぬ。此明き城の妖怪變化、きつと見届け、拙者が居城に申し請けませうわい。

沖平 御意の通りでござりまする。妖怪でも、こんくわいでも、こな微塵にして、お旦那のお望みの通りなされたがようござりまする。

十内 すりや、御自分が邪正を糺して

大學 居城に申し請けたう存じまする。

庄屋 ハイ、どうなりとなされて、早う往來なりまするやうになされて下さりませう。

大學 氣遣ひ致すな。追ッ附け實否を正し、播州一國の名城といはして見せうぞ。

庄屋 エ、有り難う存じます。ト此うち向うより弓矢太郎、着附け、麻上下にて弓矢持ち出て

太耶 ハア、誠に馬の脊を越すといふが、こゝらは降つたさうな。もう空も晴る、さうな。（トいひ〜向うを見て）オ、もうこれぢや〜。夜は恐れて人通りもないと聞いたが。大勢並んでをらるは、若し追ひ剣ぎなどでも出ようかと思つての立ち番ぢやな。よし〜。何ても今夜こそ見届けて、あつばれ高名譽れをあらはして。（トいひ〜、く〜りを入らうとする。）

沖平 待て〜。

太耶 イエ、つい近所の者でござります。ト入らうとする。）

沖平 イヤ、慮外なやつ。大切なる御上意に依つて、歴々のお立合ひの中を打通り、城内へ通らんとは、うぬは何者ぢや。

太耶 おろすなく。お立合ひ、立ち番でも遠慮はないわい。處の難儀、往來の妨げになる化け物を退治するのぢや。（トまた行かうとする。）

沖平 ハテ、待てといふに。

太耶 なぜいナウ。

十内 何さま、今晚の仕儀存ぜぬゆゑとは思へども、見れば帶刀致しをるからは、仔細が有らう。様子をいへ。どうぢや。

沖平 譯をいへ。どうぢや。

太耶 ハツく。番の衆なれば咎めさつしやるも尤も。罷り出てたる某は、此あたりにかくれない浪人者でござるが、此城内には變化が住んで、往來を妨げると聞き及んで、退治せうと思つて出かけたのでござんすわいなウ。

十内 すりや、變化を見届け、高名せんと思ふは、武士たる者の身にては、あつばれの心がけ。

太耶 イヤ、あつばれてあらうやら、あるまいやら、見ぬうちが花。正眞の盲蛇めくらにおぢすとやら。行つてやつて見るのでござります。へト又行かうとする。

沖平 ハテ、サテ、ならぬといふに。

太耶 なぜにイナ。

沖平 今晚の見分けんぶんは、手前の旦那、即ち東山殿よりの御見分お立合ひなれば、浪人風情なみのの見届けは叶はぬ。

太耶 東山でも、松風でも、遠慮はない。妖怪も、ようかんも、見届けて、名を高砂屋と上げん事、胸中に有るへいとうぢやわいなウ。へト又行かうとするを、立廻りあつて

沖平 ハテ、聞き分けのない大馬鹿め。たつて通らんとすると、打放すぞ。へト反り打つ。太耶悔りして

太耶 ア、コレく、さりとはよう阿る人ぢやわいなウ。そないにけんくいはぬものぢやわいの。

此間もどこやらの門番や木戸番が斬られたげなぞえ。

沖平 何ぬかす。へト反り打つ。

大學 待てく。

沖平 ぢやと申して。

大學 ハテ、身共が待てといふに、詞を返す慮外のやつ。

沖平 ハア。へト控へる。大學思ひ入れあつて

大學 先刻より見るところ、愚かしき詞の端々。殊に、浪人とあるが、生國は。

太耶 生國はとう丸の下、ちやばよりはちつと大きうござります。

大學 なんと。

庄屋 ハ、ハ、あなた方は御存じない筈でござります。あの人はこゝらあたりを徘徊する、弓矢太郎

といふ人でござります。

大學 すりや、われ達は見知つてゐるか。

庄屋 見知つてゐる段ではござりません。あの人は浪人に似合はぬ大臆病者で、ちつとそこへ出るにもあのやうに弓矢を離されませぬゆゑ、誰れいふとなく弓矢太郎と名乗るは、異名の切經たのでござります。

大學 スリヤ、臆病者ゆゑ、常に弓矢を放さぬ浪人、それゆゑ弓矢太郎とか。

庄屋 さやうでござりまする。

大學 さほど臆病なる身を持つて、城内の妖怪を見届けんと望むは。

太郎 ハテ、そこが一か八か、生れついでに臆病者ゆゑ、武士の交りも叶はず、親の勘當を請け、一家一門にも見放された私しなれば、此城の妖怪を見届けた者には、褒美をやらうといふ噂を聞いたが、福德の三年目。一の裏はろくろ首でも、鬼でも、蛇でも、見届けて、おのれやれ、城の主になるか、ならぬか、地獄の上の一足飛び、若し化物に喰ひ殺されたら、葬禮の入用なし。此世をさるか尾はくちなわ、手足は寅の刻に鶴を射とめた頼政の昔を今に、雁は八百、矢は三文とも思はぬ氣で、行つて見るのでござります。

大學 ヤア、野太い奴の。並々ならぬ名城の妖怪を見届け、某が居城に申し請けんと盡す此大學が前とも憚らず、臆病卑怯の浪人の分際として、イヤ、及ばぬ事を。

太郎 ア、そないにこはい顔なされますな。なんぼ臆病でも、卑怯でも、大小させば侍ひ。何人に限らず、妖怪を見届けた者は、此城を取る筈ぢやござりませんか。

沖平 ヤア、そりや世間の雑談。今日只今、東山殿より改めて御見分、主人が見届けんとお願ひなされた妖怪を、素浪人の分際で、慮外千萬。叶はぬ事とあきらめて、早く歸れ。

太郎 イヤ、そりや得手勝手といふもの。手柄はしがち。

沖平 まだ〜。こま言ぬかすと、いつそ、うぬ。(ト立廻る。太郎飛び退き)

太郎 オツト。こゝらで用意の弓矢。狼藉さつしやると、どん腹へ風穴を明けるぞ。

沖平 コリヤ〜。短氣な事すなく〜。

太郎 あやまつたか。

沖平 サ、それは、

太郎 但し見届けますか。

沖平 サア、それは、

太郎 サア〜、

兩人 なんと。(ト矢を引き絞る。沖平すくむ。)

大 学 ヤア、重々の狼籍者。家來共、そやつに繩打て。

家 來 やらんど。(ト取り巻く。)

十内 待て。

大 学 なぜ留めさつしやる。

十内 甲乙は格別、妖怪變化を見届けて、立身せんといふ志しの健氣さに、武士は互ひ。彼れが存念と

ざれば、あの者に城内の妖怪、見届けさして遣はさうと存ずる

大 学 イヤ、それでは、

十内 貴殿のお望みは子の刻より

大 学 すりや、子の刻までは

十内 あれなる浪人。

大 学 イヤ、そりや後手に罷りなります。なぜと仰しやれ。若しあの者が子の刻迄に見届けた時は

十内 貴殿の望みが叶はぬゆゑ、残念に思し召す程ならば、なぜ是れまでに見分はなされぬぞ。

大 学 ヤ。

十内 往來旅人の妨げなりと、農人共が訴人に参り、見分の御意を蒙りしゆゑ、俄かに顛倒し、イヤ、

某が見届けて居城に申し請けんとは、近頃御油断。サア、後手と罷りなれば、貴殿の不調法と申

すもの。

大 学 でも、拙者があの者の

十内 後手とは申しながら、穢かなる浪人の身をもつて、勇氣の志しを感じ、某が見分の役目蒙りしを

あの者へ譲り遣はすによつて、何と申し譯はござるまいがの。

大 学 すりや、こなたの御見分をあの者に

十内 譲り遣はす拙者が寸志。

大 学 ハテ、ナア。(ト思ひ入れ。)

十内 ナニ、弓矢太郎とやら。仔細は今聞く通り。大學殿、某、今宵見分の役目なれども、後夜までは其

方に譲りくれるは弓矢の面目、大慶と存じて、あつばれ高名武功を顯はし、其身の立身出世の種

と致せよ。

太郎 エ、有り難い。それなら宵から夜半までは、私しが見届けるのでござりますな。

十内 望みが叶ひ、さぞ満足に有らうな。

太郎 これと申すも、あなたのお情け。

十内 イヤ、禮には及ばぬ。其方は子の刻まで。短夜の砌り、随分油断なく。ナニ、大學殿、先づ旅宿へ。

大學 何様、短夜とは申せども、子の刻まで門前につつばつてもをられまい。しからば、御意の通り、旅宿へ立歸りませう。

沖平 アイヤ、子の刻より末は正眞の丑三つ頃。化け物の出るどうぶくら。益體もない。同じ夜半替りならば、宵の方に振り代つて貰ひなされたがよくござりませう。

大學 ハテ、卑怯な奴の。

沖平 ぢやと申して。

大學 まだ。構はずと、提灯やれ。

沖平 ヘイ。(ト不請々々に立ち上がる。)

庄屋 ヤレ、嬉しや。とんと化け物は今宵限ぎりに鎮まつて、あすの晩からは、こゝをのほんほで歩くと思へば、是れほど嬉しい事はござりませぬ。

十内 ホ、ウ、そち達も安堵致して、私宅へ立歸れ。

庄屋 イヤ、御冥加の爲に、道までお見送り。ナウ、皆の衆。

百姓 それ。あなた方もお淋しいやうに。

庄屋 第一、こちらがこはうないやうに

百姓 俄鬼も人数ぢや。

庄屋 ハイ、お供致しませう。

十内 しからば、大學殿。

大學 先づ、子の刻までは

太郎 わたしが役。

大學 十内殿、後刻。

大學 お別れ申す。

ト唄になり、太郎は城内へ入る。十内に百姓付き、掃懸りへ入る。あとに大學、沖平思ひ入れあつて立寄る。合ひ方。

大學 へ、何として浪人風情の業に及ぶ事ならんや。これまで數多見届けんと一命を堵けて來る者、

誰れあつて勝利を得たる者なきゆゑ、某とても、一日々々と年月を延ばし置くうちに、思ひ寄らず、土民共が東山殿へ直訴。是非今晚は差し詰まつたる城内の見分、論じ合ひ顔て浪人めに宵の間を譲りしも、彼れ埋草のかく（格？）所詮叶はぬ臆病者、きやつに瀬踏みをして、其あとより思案はさまぐ。

沖平 シテ、其御思案はな。

大學 臆病者めを自滅させ、其工夫はそちを異形の出立ちさせ、家來残らず忍びの姿。

沖平 すりや、下郎めが化生の者になつて、

大學 妖怪の業にしてきやつを打殺し、變化の業と思はず、ナ、（ト嘆く。）

沖平 天晴れのお智慧々々々。

大學 萬事の支度は、裏門より姿を變へて

沖平 忍び込んで浪人めを。

大學 ぬかるな。

沖平 お旦那。

大學 來い。（ト皆々走り入る。鐘鳴る。）

チヨン／＼にて返し

造り物、双方の棧敷高欄の處、城内の體。東西の角は角矢倉の體。向う棧敷の高欄は大門の屋根になる花道の鳥屋入り口の所は潜り城門になる。人の出入りある。正面に天主の高殿、簾懸る。弘方金襴、き處に加古川三平、蓑菴を枕にして寝てゐる體。向うより太郎、狐の面を着けて弓矢を携へ、うそ／＼出る。橋懸りより沖平、鬼の面を着けて、こなしあつて忍び込む體。矢張り雷がすめて鳴る。

太郎 テモ、サテモ、城内といふものは、途方もない廣いものぢやなア。

沖平 浪人めは何處にをるしらん。

太郎 マア、此面を着けてをれば、めつたに侮られはせん。

沖平 何でもぐつと氣を呑んで。（トいひ／＼、双方行き當り、忸り）

太郎 ワアイ。（ト飛び退き、こなし。）

沖平 ヤア、。（ト忸り、一時に關絶。此聲に三平忸り、目を醒まし、起き上がり）

三平 オ、ぐつたりとやつてのけた。ちやつと雨は上がつたが、矢ッ張り、ごろ／＼は鳴るわ。さて、月は、冴えたり／＼。白雨といふものは結構なものぢやなア。「庭の面はまだかはおかぬに、夕立ちの、空さりげなく澄める月かな、」とは、よう詠みをつたわい。とんと晝のやうな。ほんに蟻の這

ふのも見えすくわい。

と言ひく、二人を見て

ヤア、何ぢや。向うに寝てゐるのは。(ト言ひく)沖平を見て)ワアイ、鬼ぢやく。何の事はない、からくり的見るやうに、鬼ぢややら、狐ぢややら、やくたいもない家ぢやが。(ト言ひく)、よく見ることなし)ア、こりや二人ながら、面を着けてゐるのぢやな。怖りしたわい。何の爲に、てんがうな。(ト思ひ入れあつて)ハア、互ひにおどさうと思つてのわるぢやれか。よし、二人ながら、マ、さしてこまさう。(ト思ひ入れあつて、狐の面を沖平に着け、鬼の面を太郎に着け)へ、これで起きてから又怖りしをるて有らう。ドリヤ、一服のんで、さい槌を致さう。(ト煙草盆を引きよせ)南無三。火がないか。けたいな。

ト云ひく、腰下けより火打ちを出し、火を打ち、煙草をのむ。火入れへ右のほくちをあける。トばつと掛け焼硝にて観望の音する。ワアイと飛び退き、かついてゐた俵をちやつとかつき、ころりとれる。

此音に、太郎、沖平も怖り、心づき

沖平 今の音。ハテ、すさまじい。(ト言ひく)太郎を見て)ワアイ。(ト驚き、奥へ逃げ込む。太郎も思ひ入れあつて)

太郎 ヤレ、恐ろしや。さつきの鬼めがまた狐になつた。(トあたりを見て)

ホウ。どつちへやら。ハア、今の音は、鬼が芋を喰ひをつたのか。ヤレ恐ろしやく。今に動氣が止まぬ。せめて水など。(トいひく)手水鉢へかり、我が面の映るを見て)ワアイ。鬼めがまだそこにをるか。(トいりくありて)油断も隙もなるものぢやない。ちやんと手水鉢に。……イヤ、何ぼても、石の中へ入れまい。……ハア、合點の行かぬ。こりやおれが怖いと思ふ心遣ひの迷ひか。(ト言ひく)覗き見て)ハア、影が映るのぢや。そんなら何處ぞ屋根の邊りに。ハア、鬼瓦の顔か。(トいりく)こなしある。此うち三平、俵の内より覗いてゐる。ヤア、顔は鬼ぢやが、體はおれが影。おれが身振り。(ト云ひく)身振で映すこなしあつて)ヤア、さてはおれが鬼になつたか。(トいりく)あつて)エ、こりや面ぢや。ハア、面目なや。侍ひの胤ながらも、生れ附いて臆病卑怯と人に笑はれ、浪人となつて朽ち果てんより、此城の變化を見届けて命を失ふか、まんよう化け物を騙してと、思つて來た狐の面が、鬼になつたか。ハア、誠や、北條時頼記の嫉妬の段に、鬼女の面が顔にとち附いて、脱ぐにぬがれぬ執着を、發心させんと、黒髪を切つて撫てたれば、すつぽりとぬげし例も有る。……というて、女の顔に取り附いた面とは違つて、男のおれが切り髪で撫て、はぬげまい。エ、どうぞ女の髪で撫て、もらひたいものぢやが。オ、それよ。

此延べ紙は、此鏡袋に添へて貰ひし女のかたみ。黒髪の代りに、此延べ紙で撫て、見よう。

トわが鼻紙を出し、よくよく揉むこなし有つて、面の角をサツと持つて、いろ／＼をかしき事あつて、面をすつぱり脱いで

さつぱりと取れたわ。(ト首を振つて) 鬼に瘤を取られたといふ譬へはあれど、こりやおれが鬼の瘤取つたのぢや。(ト言ひく) 面を、よくよく見て) とはいへ、合點の行かぬ。おれか着けて来たは狐の面であつたのに、忽ち鬼の面に成つたのは。ハア、これも變化の業ぢやわい。(ト思ひ入れあつて) 誠に、穢れ不淨を拂ふは名香の徳。幸ひ爰にある由縁の柴舟。

ト右の鏡袋より香を出し、煙草盆にて焚く。掛け燵にて本鏡の音する。太郎「ハア」と驚き、逃げて入る。ト三平、俵冠りながら、思ひ入れ。

三平 ア、えらいものぢや。……ムウ、よい匂ひがするわ。エ、葬禮でも通るのかと思へば矢ッ張り。(トあたりを見て) ハア、これが噂のある化け物屋敷ぢやな。道理で、だ、広い所ぢやと思つたてや。(トうそ／＼あたり見廻し、氣味の悪いこなしある。トくすくすの音する。) ヤア、人も任まぬ處にくる、巻きの音のするは。

ト思ひ入れあつて、ふるへてゐる。腰元、明石、白無垢にて銀鉢に水を入れ、櫛の枝を持つて井戸より

出る。

明石 最早勤行の刻限でござりまする。

ト簾の内はすさまじき音する。と奥より腰元、龍野、同三日月、同赤穂、立ち花、三寶に高盛り、香爐を持ち出て、天守の内へ入る。此間三平そつと窺ひて

三平 ハチ、合點の行かぬ。煙草盆で一服のまうと、火打ちのほくちを火入れに入ると、今の音。南無三と引つかつた後の内から、何でも油断がならぬと覗いて見れば、幽霊が幽霊なら、足はない筈ぢやが。アレ／＼、とろ／＼といふやうなれど、ねツから笛もならぬが、何でもこの二階に、譯があるわい。

ト天守へ行かうとすると、四人、ばら／＼と出て

明石 賤しい身を以て

三日 御殿間近く

四人 何者ぢや。

三平 エ、。(ト恠り)

明石 何者ぢや。姓名顯はせ。(ト皆々懐籠にて取り巻く。)

三平 ア、危ぶないぞ。幽霊だてら刃物三昧。わしや加古川の者ぢやが、ハ、ハ、ハ、ハ、何者と尋ねさんす、マア、わい様運は何者ぢや。

三日 何者とはおろか。

明石 われは此城内に住む妖怪變化。

三平 其變化が此體は。

明石 今宵の珍客をもてなしの爲。

三平 ヤ、なんと。

明石 夜と共に馳走せうと思つて。(ト双方詰め懸る。立廻つて)

三平 忝いが、化け物の馳走は食べつけぬわい。(トはれのける。)

明石 そこをおさへて

三日 是非に御馳走。(ト双方より懸り、立廻りあつて)

三平 イ、ヤ、女子の方から据え膳は、あた大膽、な置いて貰はうわい。(ト二人をばれ退ける。)

三日 ところを是非。

明石 本膳、

明石 二の膳、

たつ 初献、

三日 おさへの

明石 手元の合ひ。

四人 お辭儀なしに(トいろく立ち廻り有つて、一しよに懸る。三平とめて)

三平 いかい御馳走。食べたも同前。

四人 折角しかけた此御馳走。(ト又四人取り巻く。天守の内より)

曙 イ、ヤ、其献立てが違つた。四人の者、待て。

四人 ハア、。

ト控へる。高殿の簾巻き上がる。内に曙の前、十二重、緋の袴にて、經机に懸り、經を讀みぬる體を
目て

三平 ヤア、十二重に緋の袴。内裏誰の後家御様。

曙 此明き城の、主といふは、即ち自ら。

三平 ハア、。すりや化け物のお頭ぢやの。

龍野 御意に従ひ、馳走の献立て、

明石 料理の手の内、

三日 中々床しき働きゆる

明石 とつくりと素性尋ねて

能野 化生の本體顯はして

明石 此城内にとゞめ置いたため。(ト又懸らうとする。)

碓 イヤ、まだ早い。

四人 エ。

碓 妖怪變化の諸人を惱ますは丑三つ時、變化自在はこつちの通力。ハテ、急ぐ事はない程に、マア其者を奥へ伴ひ、一献進めた其上で、妖怪の百物語を、ナウ、合點か。

四人 ハア。……さやうならば、サア、奥へおぢや。(ト取り巻く。)

三平 ヘイ、一献とは狐のやうな所もあれど、皆打揃うた美しい女中の化け物達の勤め。わしも岩木にあらざれば、アノ、紅葉狩りの謠ひの心。惟茂でもない薄い(?)わしを、馳走したがるは合點のかねど、マ、無明の酒の酔ひ心、鬼になるまで、飲むなら飲まうか。

碓 絶えず紅葉を焚く、紅葉の間で

能野 四人詰めの卓子料理

碓 たいめんは其上で

三平 いかい御馳走。

碓 心置かずと、マア、奥へ。

三平 そんなら女中。

四人 案内せう。サア、おぢや。(ト懐籠にて取り巻く。)

三平 其太刀の魚も久しいものぢや。(ト皆々に取り巻かれて入る。)

碓 マア、これで一人は方附いた。

ト唄になり、簾おける。合ひ方になる。太郎、うそく出て

太郎 ア、今まで誰れあつて見届けなんでも無理ではない。テモサテモ、不氣味な事だらけぢや。鬼が出たと思ふ所へ、すんと雷りが落ちた其上へ幽霊とは、くはせ金五の罎を見るやうな事ぢや。……かうあへられては、弓も矢も叶ふもんぢやない。何でもヂツと氣を落ち附けて

ト下にとつかりゐて、思ひ入れある。

ア、何ぞ一口飲みたいものぢやが、手水鉢には懲りたもんぢや。

ト思ひ入れある。内より八重菊丸、振り袖の形にて、茶臺に茶碗を乗せ、持ち、太郎の側へ行て

八重 お茶上げませう。(ト差し出す。)

太郎 明のかはくどうぶくらへ、お茶とは忝い。(ト取らうとして、八重菊丸を見て、こなし。南無三。又出たぞく。)(ト飛び退き、不興)イヤ、其手は、たべんく。最前から、鬼やら、幽霊やら、盛りかへく、様々御馳走にあうて、喉のかはく厨中へ持ちかけるお茶。めつたには飲まれんてエすてや。(ト思ひ入れある。)

八重 コレ、申し、私しは人間でござんすわいなア。

太郎 合點ぢやて。幽霊も、鬼も古いと思つて、矢ッ張り人間とは久しいもんぢや。

八重 申し、お前お侍ひ様かえ。

太郎 事もおろかや、侍ひてなうて、二本差すものかいなう。本侍ひの生粹なれど、ちよつとした色事で、浪人ぢやが、何と、別に浪人ぢやて、破れ紙子に編み笠着て「翠帳紅閨」……と諷ひうたうて歩くやうな、しみたれ浪人ぢやないぞ。侮つてもらふまいぞ。弓矢太郎といふ者ぢやが、しかも此明き城の妖怪を見届けて、この主になるのぢや。

八重 主とわえ。

太郎 オ、主といふは主の事。同じ主でも池の團龜なら、すぼんぼえといふ主とは違ふぞ。

八重 それにしては、いかう臆病な主ぢやぞえ。

太郎 ホ、ウ。臆病とは世を忍ぶ假りの名。誠はちつとばかり卑怯をといふものぢや。それで、いざといは、女子でも、若衆でも、めつたに相手に仕かねるのぢやないぞ。何をあたちよこ才な。さういふおのが卑怯者ぢや。なぜ化け物らしい高入道になつて、髪うツさばいて、大きな女子の首になど化けはしをらいて、あた美しい、よい食ひごろな、(トいひく)少ししなつかうして、ちやつと飛び退き)へ、、、。なんぼ可愛らしうても夜ばかり、忍び出ての本肉(?)の化け物はいやぢやわい。

八重 オ、笑止。コレ、じやらくいはずと、マア、人のいふ事をつくりと聞いて下さんせ。わたしやお前に、ちつと頼みたい事がござんすわいなア。

太郎 オツと、皆までいふまい。お定りの通り、門口のお札をまくつて下さんせいなア。といふのであらうがな。

八重 イ、エ、そんな事ぢやない。わたしはなア。(ト云ひく)太郎の側へ寄ると、そろくあとへ寄り)

太郎 エ、く、く、氣味のわるい。めつたに側へ寄るな。

八重 でも、高うは言はれぬ事ぢやわいなア。

太郎 ウム、此造りて大きな聲ではいはれぬ事とは、心中しんぢゆうの讀み賣りか何ぞのやうに、ハア、坊主だ
てら、獄門に懸つた西念寺のばつちりてはないか。

八重 何を、じやらくいはすと、マアわたしが言ふ事をな。

太郎 サア、聞けなら聞かう程に、めつたに側へ寄らずに、つ、とそちらから言うたり。(ト弓に
限界しきりをする。)これよりこちらへ、寄るまい。

八重 コレ、お前の正しやうな氣を見込んで、身の上の様子を明かします、何を隠しませう、心に深い望みの
ある者でござんすわいなア。

太郎 心に深い望みとは、エ、皆まで聞くに及ばん、敵討かたきちか。イヤ、横着者めが。敵討ちとさへいへ
ば、陳ちんの小口(?)も逃のがる、と思ひ、よいかてつほう(?)。

八重 エ、お前は疑ひ深い人様ぢやなう。

太郎 イヤ、深いやら、浅いやら、まだ鹽梅は見やんせんけれど、大方知れてある筋ぢやてやなア。か
ういふ差し向ひになると、敵討ちといふところぢや。サア、誠の敵討ちなら、手の内見よう。

ト切り懸るところを、傍なる茶碗を八重菊丸へ打ちかけると、八重菊丸身をかはず。松に釣つて有る中
鐘かねに當つてサヤンと鳴る。

ハテ、天晴れの心掛け。(ト双方こなしある。内にて音楽になる。太郎胸り。)

ヤア、あの音楽は。(トきつとなる。内より腰元龍野、菓子盆を持ち出て)

龍野 さもしけれども、お慰みに。(ト差し出す。太郎氣味わるさうに見て)

太郎 何の事ぢや。あの半鐘がヂヤンと鳴ると、ヒイドン。天王寺の伶人か、平野の練り供養のやう
に、しやならくと、此菓子盆を美なる女性によしやうが持つて出て、さも面映おもはせき其風情は。

龍野 お淋しからうと思つて。

太郎 いかさま、御馳走でござります。

龍野 さうしてマア、さつきにから見てるれば、

八重 わたしを捕へて、じやらくと、人の言ふ事は聞かずに、大體わるじやれな方ぢやわいなア。

太郎 ハテ、かう見たところが、戀ひのいろはに三五の十五か、六、七、八の間の姉妹きょうだいぢやないかの。

龍野 姉妹とわえ。

太郎 ハア、姉妹とは鐘立ての俳名。ナア、二人ふたりながら眞白な化生の者か。サア、假粧けぼし、化粧けしやうは女の嗜

み。ア、むかし思へば信田の狐。わしも、古へは、色に迷うて、此身になつたのぢやわいな。
龍野 イカサマ。かう見たところが、どうやら粹らしい殿振り。

八重 そんなら、こなさんも色に迷うて。

太耶 親の勘當受け、此身になつても、可愛い奴の形見の佛、身に添ふ心。コレ、肌身離さぬ此鏡。

ト鏡袋を出す。

龍野 ムウ、そんなら其鏡は、

太耶 可愛い奴が形見の鏡。(ト袋より鏡を出し)二人一しよに

ト八重菊丸、龍野を寫し見るこなし。兩人鏡見て思ひ入れ。

八重 ア、移れば變る世の有様ぢやなす。

ト鏡を見て無念のこなしある。少し泣く。太耶思ひ入れ。

太耶 ムウ、此鏡に、移り變る浮世を恨みたる體は。

龍野 エ、。(ト八重菊丸の方へ思ひ入れあつて、ちやつと鏡をのけ。)オ、何ぢやいなア。

太耶 怪しき姿が寫るぞ。

龍野 エ、。(ト太耶も氣を替へ)

太耶 どちらが姉であらうぞ。

龍野 サア、指いて見さんせ。

太耶 ムウ、そもじは菓子を持つて出たが、どうやら心あるへいと。エ、松風ぢやによつて、アア、

姉の方かい。

八重 そんならわたしは、

太耶 村雨なら妹ぢやけれど、茶を持つて出たからは、濃茶か、薄茶か、一寸加減を見ねば

ト引き寄せせうとするを、突き退け。

八重 服加減とわえ。

太耶 サア、其加減とは。アレ、丁度よい加減な音楽。相應な二人の内、女蝶か、男蝶か。

八重 ナニ、男蝶とはえ。

龍野 女蝶とはえ。

太耶 ハテ、きよとくしい、其顔は何ぢや。

龍野 ても、わたしら 女蝶、

八重 男蝶とはえ。

太郎 男蝶は西を向いてお禮申すぢや。(ト八重菊丸を突き廻す。)

八重 エ。

太郎 女蝶は東を向いてお禮申すぢや。(ト龍野を突き廻す。)

兩人 エ、何の事ぢやいなア。

太郎 ハテ、そちらむいた所を。(ト龍野八重菊丸が帯の端を取つて) えて此帯の端をすつと引くと、中から尾の出るもんぢやぞ。

兩人 ナニ、阿呆らしい。(ト振り切る。)

太郎 ハ、。矢ツ張り本眞の人間ぢや。

兩人 人間であらうがな。

太郎 イヤ、油断はならぬてや。とつと人の可愛がる最中に。女子だてら、こんな廣い、びやう／＼とした所にて、怖うはないかえ。

兩人 何のマア。

太郎 何のマアとは、氣の強い子ぢやわいなう。コレ、そないにすげなうせずと、マアこゝへごんせいなう。(ト二人の手を取り、握つて見て、いよく畜生ではないと落ち附くこなし。) とんと黒犬に噛まれて灰汁

の和洋とやら。さつきにから、いろ／＼試して見てはばい、尻であつたわいなう。モウ／＼、とんと氣が落ち附いたが、マアこなさんは、何の爲に、そんな形ぢや。

兩人 サア、それはの。(ト顔見合はす。思ひ入れある。)

太郎 めつたに爲にならぬ事もせぬ程に、言ひ聞かさんせいの。

八重 何を隠さう、わしらはの、

龍野 ア、コレ。(ト思ひ入れ。太郎もきつとこなし有つて)

太郎 エ、氣味のわるい。言はうとして、止め／＼すると、病ひになるぞえ。コレナウ。

ト八重菊丸を捕へうとする。龍野ちよつと隔て、

龍野 エ、わるじやれな。あんまり翹つて下さんな。

太郎 何のわるじやれ。(ト引き寄せうとする。振り切る。立廻りあつて、一寸懐へ手を入れ) エ、むつちりとした此乳。

龍野 ア、コレイナア。(ト突き退けるを、サツと引き寄せ)

太郎 唐人の乳見たやうに笑ひ顔。エ、憎うないものぢやなア。

ト振り切り逃げるを、コレと追ひ駆け、立廻り有り、又八重菊丸を捕へ

どつこい。かたみ恨みのないやうに、(ト八重菊丸の懐へ手を入れ)ヤア。

ト思ひ入れ、八重菊丸ちやつと振り切り

八重 エ、何するのぢやぞいなう。

太郎 正しく男。(ト三人恠り、きつと思ひ入れ有つて)

兩人 それ知られたら、もう。(ト双方より懐籠にて突き懸る。太郎立廻り有つて)

太郎 妖怪の正體。

ト立廻りになる。太郎、龍野を一才當て、八重菊丸に懸るを、立廻りあつて八重菊丸、井戸へ飛び込む。

太郎、つか／＼と行つて、井筒を踏まへ、きつと見得。

さては抜け道の空井戸。ハテナア、桃の井断絶より、妖怪變化の住家となりし此明き城に、怪しき形にて女に出て立ちしは、ハテ、心得ぬ。顯はし見んと懐中の、鏡にて照らせど恐れもなく、却つて、愁傷の體は、自然と怒りを顯はすは。心はずと、手練を試さんため、打ち掛けし器物に身をかはせしさそく、思はずあの半鐘に當れば、合ひ圖と覺しく、音楽につれて出て來るは女の肌。紛らはしき曲者は此井戸の中へ。ハテ、いぶかしやなア。

ト屹度見得になる。又音楽。向うより鹿間大學忍び込む體。沖平も妖怪見届けたる體にて

大學 さてこそ弓矢太郎、妖怪を見届けたか。

太郎 いかにも見届けました。

大學 シテ、其正體は。

太郎 めつたには申すまい。

大學 なぜ。

太郎 ハテ、子の刻までは私しの役。まだ九つも満てず。十内殿お出での上。

大學 イ、ヤ、いはれまい。何として、所詮おのれが及ばぬ事。

沖平 子の刻まで待つに及ばぬ。

大學 いつそ手短かに。(ト駆け込まうとする。太郎留めて)

太郎 待つた。こりやどれへござる。

大學 知れた事、妖怪を見届けに。(ト又行かうとするを留め)

太郎 イ、ヤ、子の刻までは、此太郎が役目。

大學 ヤア、ちよこ才な。手柄は仕勝ち。

沖平 邪魔ひろぐな。(ト太郎を留める)。

大學第一、心得ぬは此天守。

ト上がらんとする。ドロ／＼にて、逆さまに蹴落され「ウン」と悶絶。

太郎 ハテ、心得ぬ。あの高殿へ上らんとすれば、忽ちこゝに蹴落されしは。

神平 何にもせよ、且那の名代（ト行かきとするを、留めて）ヤア、面倒な。

ト太郎を引き退け、上がらうとする。ト又神平蹴落される。はずみに井戸へはまる。太郎きつとして

太郎 傳へ聞きし八幡太郎義家公、殿上（もと）の下にて、三度弦音をして變化のものを退け給ふ慕目の法。

トこなし有つて、弓を香ひ、放して

此城中、暫く拙者預り奉ります。ト平伏する。

碓 イ、ヤ、そちに預ける事は叶はぬぞ。

太郎 ヤ、なんと。

碓 多治見藏人が伴純太郎、此どころには叶はぬ。早く歸れ。

太郎 ナニ、某を藏人が伴純太郎とは。

トきつとなる。ト奥より歴元明石、赤穂、三日月、ばら／＼と出る。龍野は心耐きし體にて、取り巻き

四人 多治見純太郎殿、早く歸らつしやれ。

太郎 ハテ、心得ぬ。某が名を多治見純太郎と知る其上に、此有様は。

碓 ホウ、そちが本名、委細を知つたるは此の矢。

ト簾巻き上げる。ト碓の前矢を携へ、立ちぬる。太郎悔りして

太郎 ヤア、心得ぬ。官女の出立ちにて、其矢を以て、某を多治見純太郎と知つたる仔細は。

碓 鳴弦慕目の故實をまねび、射かけし矢尻に矢の根はなくて、蓬の素矢。朱肉をもつて多治見氏と

印したが、慥かな證據。

太郎 すりや、其矢の根にて、某を多治見何某と

碓 知つたる譯は、桃の井家に代々弓大將を給はる藏人が伴、純太郎へ改めて御上意。

太郎 ナニ、御上意とは。

碓 當主桃の井修理太夫様、若殿陸次郎様の御上意。

太郎 ナ、なんと。

ト悔り、碓の前、上段に飾り有る位牌を高く直し、遙か下がつて思ひ入れあつて、ゲツと泣く。太郎も思ひ入れ。

ムウ、すりや、其二つの位牌は

八重菊丸殿のお力に、頼まんがためばかりの、心遣ひぢやわいなう。

太郎 天晴れ、女儀に似合はぬ健氣の御賢慮。して又、付き添ふ此女中方は。

碓 龍野。

龍野 ハア、。

碓前 明石。

明石 ハア、。

碓前 赤穂。三日月。

赤三 ハア、。

碓前 皆領分の名を附けて、怪しく見せる白小袖は、大殿の喪に籠りし三歳の忌。近江の領主とも、此位牌に傳かつき奉る志し。書寫山より八重菊丸を呼び下し、人目を忍ぶ女姿。今日一週忌の御命日古へならば菩提所はもとより、諸寺、諸山の貴僧達、千部萬部の御追善、御供養もあらうのに、やう／＼此明き城に世を忍ぶ身の、あるに甲斐なき姫御前の靈供物おんきやうぶつも心ばかり。御經讀おんきやうどく誦も自らが、心一つの手向けの花も、開かぬ運か桃の井の、萎み果てたる世の盛衰。是れが播州一國の大殿様、若殿様の、お吊ひか、供養かと思へば、ほんに、身も世もあらぬ自ら心の内、悲しさを

推量してたも、純太郎。皆の者。エ、變れば變る世の中ぢやなア。

トいろ／＼あつて泣き落す。女ども皆々思ひ入れ。

四人 お道理様でござりますわいなア。(ト介抱する。太郎も思ひ入れあつて)

太郎 其御無念は家中一統。若殿の御最後は内膳。實否を糺し、大殿の

龍野 御敵おんかたきも外ては有るまい。

明石 女ながらも私しらも、

三日 御恩受けた若殿様の敵かたき、

碓 大殿様の御敵、

四人 討たいでおかうか。

太郎 オ、潔いさぎよき女中の志し。碓の前の御貞心。只此上、大切な八重菊丸様の御身おんみの上。

トばたく／＼にて神平、八重菊丸切り結び出る。

神平 思ひ掛けなう陥はつた空井戸。抜け道の様子を見れば、紛らはしき女め。詮議の手懸り。

ト引き立て、激しき立廻り

八重 それ見られたら、もう是非に及ばぬ。(ト神平をギンと切る。)

太尉 ヤア、これは。

八重 最前そちに見顯はされ、井戸へ入つて、抜け道より奥の寢所へ入る所を、見咎めしゆゑ此通り。
太尉 さてこそ、推量に違はず、あなた様が

八重 東山殿の御不興を蒙りし桃の井の血筋、此ところに籠城を憚る女姿、まことは書寫山の八重菊丸
とは某ぢやわいやい。

太尉 ハテ、……嬉しやなア。(ト思ひ入れ。大學心附いたる體にて起き上り)

大學 妖怪の様子残らず見届けた。修理太夫が思ひ者碯の前と云ひ、八重菊、女と化して、諸人を誑か
す。此城内見届けし上は、東山殿へ言上して、一々逆磔ぢや。覺悟せい。

太尉 御領地に住みながら、恩を仇する大學の人非人。東山殿へ讒言などとは

大學 イヤ、小癩な奴の。かう破れ出すからは、どいつもこいつも、用捨はない。一々枝葉を枯らし、
此國を押領するわい。

碯 エ、其邪まな心ゆゑ、最前あの天守へ登らんとせし時に、御罰を蒙りしを忘れたか。

大學 まことに心得ぬは、某に限らず、あの天守へ上らんとする者は蹴落さるゝは、ハテ、心得ぬ。

碯 オ、其不思議も暗らさせやらう。

大學 何がなんと。(ト碯の前位牌の屋根を取り、中より鐘の聲は入りし呼ぶ子の笛を出し)

碯前 往昔神后皇后、三韓御退治の砌りより、尾上の鐘もろともに、此地に留まる、軍器の此呼ぶ子、
人知れず大殿の御位牌の内へ仕込み、あの御天守に敬ひ奉るゆゑぢやわいやい。

太尉 さてこそ神代より傳來の軍器の威徳か。ハ、ハ、有り難い。

大學 其呼ぶ子を。(ト取らうとするを、太尉立廻りあつて)

太尉 どつこい。めつたに渡してよいのかい。(ト沖平手負ひながら起き上がり)

沖平 其呼ぶ子を。(ト懸るを、本鐵砲の音する。沖平「ウン」と反る。)

碯 ヤア、これは。(ト恠り。加古川三平鐵砲携へ出て)

三平 大切な寶の様子、此場の譯を知つたる奴は、一人も生けては置けぬ計略の種ヶ島。

太尉 すりや、こなたは。

三平 陸次郎様にお乳を上げたる乳母の傳、加古川の三平といふ者でござります。

碯前 最前奥にて始終の名乗り。先祖の苗字に改め、尾形三平といふ、若君のお身方ぢやわいなう。

大學 ハテ、さまぐの奴が邪魔ひろぐな。

三平 おのれが月形と懸んだ下郎、冥土の魁け、地獄の場取りさして置いた。きりく追ひ附く川意々

々。

大學 イヤ、慮外な奴やつの。かほどの大義を思ひ立つ大學、わづかの下郎を力に頼まんや。かねて用意は此通り。(ト懐中より笛を出し、吹く。) ハテ、めんような。合ひ圖を遣へしは。

三平 其管々々。呼ぶ子を合ひ圖に取り巻く管の、わい殿の家來共は皆締め上げて置いたわいなう。
大學 ヤア。

三平 お望みなら、お目に掛けう。

ト腰に附けてある繩を引くと、黒裝束の侍ひ六人、珠數繋ぎにして引き出す。

大學 ヤア〜。すりや残らず

三平 おてちんぢや。覺悟せい。

大學 エ、いま〜しい。もう是非に及ばぬ。大學が死にもの狂ひ。覺悟せい。(ト切つて懸る。)

三平 何さらす。

ト突き廻す。トすぐに太郎に切つて懸る。立廻りあつて大學が刀をきつと見て

太郎 ヤア。此刀は來國吉。

大學 なんと。(ト又立廻りあつて)

太郎 拵へは秋の野、目貫は臥猪よすの後藤が細工。

大學 どつこい。(ト一々立廻りあつて)

太郎 紛れもない、親藏人殿の刀。

大學 なんと。

太郎 親藏人殿、不斷肌身離されぬ此刀。御最期の砌りより紛失せしは、さてこそ敵かたきの詮議の手懸りと思ひしゆゑ、今日こんにちまで口外致さぬは、即ち證據の此刀を所持するからは、二品のお寶を奪ひ取りし盜賊、親藏人殿の敵かたき。

大學 イ、ヤ、覺えない。

太郎 覺えないとは卑怯な。親の敵。

三平 寶の盜賊。

太郎 尋常に白狀せい。(ト取り巻く。)

大學 是非に及ばぬ。かうなるからは、有りやうに打ちまいてくれう。いかにも藏人を手に掛け、東雲の香爐かまど奪ひ取つたわやい。

三太 さてこそな。

三平 まだしも立派の白狀。サア、香爐これへ出して
太耶 親の敵、勝負せい。

大學 いかにも勝負はしてくれうが、香爐はこゝにない。

三太 なんと、

大學 印南内膳と心を合はせ、此播州一國を押領して根城となし、東山殿を討ち滅ぼし、日本六十餘州
を手に入れんと、謀叛徒黨の一身合體の印しに、其香爐は、即ち内膳が弟大藏に渡して置いた。

太耶 ヤア、紛らはしき其一言。其香爐はこゝに。(ト懐中へ手を差し込む。立廻りあつて)

大學 こりや何ひろぐ。

太耶 此香爐を。(ト引き出す。)

大學 それを。(ト懸るを、立廻り有つて、服袴を開き、連判狀を出す。)

三平 ヤア、これは。(ト連判に手を掛ける。太耶と二人引ッ張つて見る。)

太耶 いかにも印南内膳と合體の印し。

ト思ひ入れのうち、物云はずに切り懸る。三平抜き身を叩き落す。太耶切り懸るゆゑ、大學逃げうとす
る先きへ、牛窓十内つゝと出て、立ち塞がり

十内 妖怪の正體見届けた。動くな。

太耶 御見分の上は、サア、尋常に勝負せい。(ト詰めかける。)

大學 是非に及ばぬ。(ト切りかける。太耶凍々しく立あつて鹿間大學を切り、止め刺す。)

太耶 親藏人の敵も首尾よく、香爐の在所も知るゝ上は、いづれも、おさらば。

ト腹切らうとする。牛窓十内とめて

十内 待つた。何ゆゑの切腹。

太耶 ハチ、亡父の敵とは申しながら、御主人のお家没落の砌り、浪人の身にて、足利家の昵近なる大
學を討つたる申し譯。

十内 イヤ、切腹には及ばぬ。大學は變化見届けの役。

太耶 ぢやによつて

十内 一命を失ひしは變化の業と、サア、見分の某が言上すれば相濟む事。

三平 ハア、お情けのお言葉。

太耶 すりや、私しは

十内 切腹には及ばぬ。香爐の代りに、其連判狀を東山殿へ差し上げ、跡目相續致すが肝要ぢやが。

ト右の連判を弓矢太郎に渡す。

碓前 ア、残る方なき十内殿のお情け。

十内 イヤ、お禮は憚り。とやかく申すも古主の御爲。

碓前 古主の爲とは。

十内 元來拙者は富家中、高岡源吾が弟なれども、故有つて隣國牛窓家に養父の家名を相續致せど、御縁は繋がる拙者ゆゑ、今夕の見分を幸ひ、何事もお爲をあしく存ぜぬ某。此上ともに、萬事お心置きなく仰せ聞けられい。

碓前 思ひも寄らぬお心ざし。さやうならば八重菊丸を

十内 ア、イヤ、尤も若年とは申しながらも、お咎めを蒙りし桃の井家の末子、本城に忍ぶは上への恐れ。ナ、女姿を幸ひに、一刻も早く、何方へなりとも。

太郎 御尤も。というて早速

三平 私しが在所へお供致しませう。

太郎 すりや、其許の

三平 ハイ、丁度幸ひな事はお露というて、私しがためには腹習りの妹めが、其内膳殿の奥方に奉公して

をりますれば、幸ひ實を詮議の手懸りにも、なりさうなものかと存じまする。

碓前 オ、それこそは願うてもない事。(ト八重菊丸を連れ出て) さやうならば、お家の治まるまでは、お乳の由縁の三平方へ。

(145)

八重 思はぬ世話になるも

三平 サア、若君様ではない、女中様。

八重 そんなら母様。

碓前 もうござるか。ア、暫しの内も(ト八重菊丸と顔見合す)

八重 お別れと思へば

碓前 せめて父御の此お形見。(ト呼ぶ子の笛を渡す) 父御様とも、此母とも、思つて呼ぶ子の笛。

八重 エ、有り難うござりまする。

三平 ハア、まことに變生男子に引き替へて、八重菊様の女姿、碓前の貞節は、世になき主人へ、隣の忠臣、女偏に臣と書いては姫と訓ずる、文字の形をその儘に、此明き城を今日より「姫ヶ城」と呼ばするは、碓の前御親子へ、某が寸志ばかり。

碓前 成る程、世を忍ぶには此姿。

穂 播 州 廻

(144)

歌 集 本 脚 伎 舞 七 卷

三 太 姫ヶ城の異形も幸ひ。

十内 家督相續までは、只いつまでも。ハテ、姫ヶ城の變化の様子を見届けし上は、此城の儀も萬端宜しく言上致すが、見分の某が役目。

碓 さやうならば、とてももの儀に、跡目の願ひも

十内 拙者に任し、純太郎は其連判を

太郎 御前へ差し上げ

十内 二品の寶、奉ね出すまでの

太郎 日延べのお願ひ。

十内 碓の前は、等閑なく

碓 此城を預ると、いひ習はせし天守の妖怪。

十内 油断は大敵。

龍野 若君の御門出。

明石 外へは洩らさぬ

赤穂 此場の

六人 血祭り。

ト加古川三平、弓矢太郎、龍野、明石、三日月、赤穂繩附きの家來の首を一時に切る。皆々場の中へ据うる。

十内 オ、天晴れ。

三平 妖怪。

太郎 變化の正體。

十内 慥かに見届けた。

碓 檢分御苦勞、

ト目禮する。双方よろしく 幕

三つ目 舞子の濱の場

登場人物

小女郎ノ子、福壽狐。駕昇さ、三藏。同じく大八。平作ノ子、平吉。早川伴藏。うらやさん 實は 印南大藏。平次兵衛。小女郎狐。女房、お辰。仕出し、大勢。侍ひ、大勢。

造り物、瀑幕、前土手。方々に並木あり。よき所に臈洞口に「須磨寺同向」といふ建札あり。橋懸りに占
ひ店、賣茶屋あり。在郷唄にて暮明く。仕出し大勢出て

仕出 なんと、太郎兵衛、きつい群集ぢやなう。

△ イヤモウ、こんどは須磨寺に結構な同向があるによつて、天氣はよし、大抵の参りぢやない。

□ イヤ、そりや其筈ぢや。此舞子の濱の景といふものは、大抵よい景ぢやないわいの。

○ サア、子供を連れて、焼き豆腐に、かます子の煮染めの辨當して、此濱で毛氈でも敷いてナウ。

△ サア、おれも、こちのか、と坊主めに一張羅着せて、連れて参らうわいの。

□ 貴様達は世がよいによつて、さういふ思ひ附きがある。こちらのか、めは、朝の起きるから、ず
うくと琴唄に困りますわい。

○ ハ、い、イヤ、とかういふうち、よつ程暇がいつた。もう去なうか。

△ オ、い、去なう。サア、皆ござれ。

トわやくいって入る。早川伴藏、代官にて、侍ひ大勢連れ出る。

伴藏 家來共、此うらやさんめ、合點がいかぬ。引摺り出せ。

ト占ひの籠引きちぎり入る。トうらやさん種い山伏の形にて、侍ひ一兩人投げて出る。

家來 動くな。(ト取巻く。)

山伏 なんて此山伏しに、繩懸れといはつしやる。(ト伴藏、山伏しが顔を見て)

伴藏 ヤア、こなた様は御主人内膳様の御舍弟、大藏様。

大藏 そちや早川伴藏。こりや何事ぢや。

伴藏 されば、大藏様。此たび主人内膳様、大殿の妾腹の若君八重菊丸を取り立て、お家を引き起さう
と忠臣の願ひと見せかけ、まことは家國を押領。

大藏 サア、兄者人の其思し召しは、かねて身共も存じてをるが、何をいうても勘當うけた此様。

伴藏 拙者も此如く、方々詮議致すは、彼の八重菊丸、書寫山を脱け出て、行方知れず、それゆゑ此街道
の煎賣茶屋占やさん、非人小屋まで打毀ち、吟味致し、若し八重菊丸をかくまひをらうかと存じ
て。

大藏 ムウ。それ聞く上は、此大藏も、兄者人へ勘當詫びの綱に、共々八重菊丸を詮議致してくれう。

伴藏 まだ外に詮議致す奴もあれば、何かは篤と、

大藏 いかにも。こゝは往還。向うの森にて、篤と聞いた上。

伴藏 しかれば大藏様。

大藏 伴藏参れ。

ト在郷唄になり、大藏、伴藏、家來連れ、橋懸りへ入る。ト向うよりお辰、平吉、相與あしにて駕昇き三藏、大八、平次兵衛附いて出て、本舞臺へおるし

三藏 サア、親方。こゝが極めの所てごんす。

平次 オ、大儀ぢやつた。サア、娘。孫よ。こゝが舞子の濱ぢや。ちやつと出い。

お辰 アイ。サア、平吉もおぢや。(ト駕より出る。)

大八 親方。酒手も駕賃も先きへもらふ。こゝておろすは惜しいもんぢやけれど、せう事はごんせぬ。

三藏 さうしてお前方は須磨寺へ参るのぢやな。

平治 オイナウ。娘や孫を連れて、須磨寺の回向に参ります。こりや坊主よ、こゝから須磨までは間はない。これからそろゝ歩いていなうぞよ。

平吉 ぢい様、わしや駕に乗るより、歩くのが面白いわいなう。

お辰 オ、さうであらう。どうて駕の内は窮屈な。わしもこれから歩かうわいの。(トこなしあつて) 申し、とゝさん、時世とはいひながら、此國に騒動がなけば、此お子も

ト言はうとする。平次兵衛ちやつと引き取り

平次 ハテ、大事の此孫、怪我さしてはならぬゆゑ、駕借つて來たのぢやわいやい。

ト駕昇きへ思ひ入れ、お辰も思ひ入れあつて

お辰 ほんに、それ。何の、高が百姓の此子、歩かしても大事ごんせぬなア。

ト三藏、大八目醒せして

三藏 イヤ、おいらは是れから向うへ行て、貰つた酒手で一杯飲まうな。

大八 オ、それ。ちやつと行て引ツかけう。

三藏 お内儀様、親父様、戻りに駕がいるなら貸しませうぞえ。

平次 オ、戻りに借らう。大儀であつた。

ト三藏、大八駕昇いて橋懸りへ入る。あとに兩人こなし。

娘とした事が、づかゝと物いふものではある。

お辰 サア、さう思つてゐたけれど、ついふつと、(トこなしあつて) 思へば、此お子がお痛はしさに。(ト平次兵衛あたり見て)

平次 サア、おれも以前は桃の井家では、近藤平次兵衛といふ侍ひなれど、聊かの事有つて、浪人して、今では大倉谷へ引ツ込んで百姓してゐるうち、ちも段々成人なれば、おれこそ百姓て果つらと

も、せめてそちは、以前の通り、侍ひの奥様と、おれも思へば、そちも其心て

お辰 サイナア、わたしが願うて主水様のお屋敷へ行た所が、侍ひの義理を立て、矢ッ張り女夫になつてやらうというて下さんす。ヤレ、嬉しやと思ふ間もなくお家の騒動、それからすぐに、連れ立つて戻つて、今、此やうに添うてるも、矢ッ張りお前のお蔭。

平次 此平吉は、妹が勤めのうち、言ひ交した若殿陸次郎様のお胤。家中を憚り、薬の上からおれが手鹽に懸けるも、やはり主従の縁の盡きぬところ。掣の平作が爲にもお主なれば、此若君を護り立て、桃の井家を再び引き起さうとかねての願ひ。それで、此平吉が成人を待つてゐるわいなう。

お辰 どうぞさうなれば、此平吉は國の殿様。

平次 掣も以前の古佐壁主水。

お辰 お前も御隠居。わたしもまた

平次 御家老のおかもじ様。

お辰 今の手業は昔語り。

平次 一寸出るにも、飯乗り物に徒士若徒。

お辰 馬に乗つてハイシイドウ。

平次 娘とした事が、なんぼう侍ひぢやと云うて、女子が馬に乗るものかいやい。

お辰 ほんになア、拍子に乗つて、いろくの事いうたわいなう。

平吉 ぢい様、もう参らしやらぬか。

平次 話しに現ぬかして、参る事をとんと忘れた。サア、娘、そろく行かうか。

お辰 それがようござんせう。サ、平吉、手を引いてやりませう。と、様。

平次 サ、行かう。

ト唄になり、お辰、平吉が手を引き、平次兵衛と連れ立ち橋懸りへ入る。ト臈病口より早川伴藏、三藏、大八を連れ、家本大勢出る。

伴藏 兩人の者、いよく其通り、違ひはないか。

三大 さやうでござります。慥かにさうと詞の端々。

大八 國松に違ひはござりませぬ。

伴藏 しかば篤と吟味の上、いよく若殿陸次郎が伴なれば、御主人内膳様へ連れ行く。其上にてそち達も、きつと御褒美遣はさる。

三藏 それは有り難うござります。

伴藏 シテ、其親子の者はいつれへ行た。

大八 須磨寺へ。

伴藏 ムウ、すりや、程は行くまい。引ッ捕へて、篤と實否を糺して。そち達も必ずぬかるな。
二人 畏つてござりまする。

伴藏 家來參れ。

ト合ひ方になり、家來引き連れ、伴藏先きに皆々橋懸りへ入る。ト向うばたくにて少女賤氣、福壽草

か抱き、走り出て

小女 ア、これぢや。今の犬。テモ、恐ろしい事ぢやあつたなう。もうくゝ氣遣ひはない。サアくゝ
おぢやくゝ。(トおろして手を引き、本舞臺へくる。)

福壽 コレ、か、様と、様のゐやしやる所は、まだ遠いかいなう。

小女 まだこゝから五六里もあらうが、女子の足でそなたを連れて急いで來たも、主のお目に懸つてな
(ト思ひ入れあつて) まだ日は高い。ちつとマアこゝで休んで行かう。

福壽 それならおりや、向うに美しい花が有る。取つて來うわいの。

小女 イヤくゝ、怪我したらわるい。よしにしやくゝ。

福壽 それでもおりや欲しいもの。取つてくるぞや。(トいひくゝ上手へ入る。)

小女 ア、コレくゝ。危ぶないわいの。若しまた犬がゐると、アレくゝ、……必ず怪我しやんな。

こゝに待つてゐる程に、早う戻りや。ほんに、腕白な子では有るわいの。……此姿で夫に逢
うて、何かの事をいうて、たとへ否といはしやんしても、無理に連れて戻らねば、大切な……
どうぞ得心して戻つて下さんすればよいが。

ト此うち占やさん、臍病口より出掛け、始終聞いてゐて、此時

大藏 妹。

小女 エ、。(ト大藏を見る。大藏つかくゝと出て、小女郎が手を取る。)

大藏 妹、久しいなア。(ト泣く。小女郎振り放し)

小女 エ、何の事ぢやいなア。

大藏 コリヤ、そちはおれが眞實の妹ぢやわいわい。

小女 誰れがいなア。

大藏 そなたがいなう。

小女 ほんに、いろくゝの事を。こちやそんな事は知らぬわいなア。

大藏 オ、知らぬか。道理々々。そなたが小さい折ぢやによつて、何にも様子は知りやるまい。おれやそなたの親はの、大阪聚樂町で古道具やをしてをられたけれど、道具のわづらひ下疳ゆゑ、身の上の骨うづき、安物買うた報いにて、一日の煙りも立てかね、そなたをば今の親の所へ養子にやり、それから後に親父様は烏羽の祭りの餅が咽喉へつまつて、敢ない最期。其菩提の爲に、このやうに坊主になつて高野へ登り、石童丸が尋ねて來ても、親子の對面せず、覺りきつても切られぬは輪廻の絆。ア、小さい折別れた妹のそなたに、逢ひたいくと、鬼界ヶ嶋をうろくと尋ね逃うて、今日こゝで廻り逢うたは、盡きせぬ縁ぢやわいなう。

小女 そんならお前は、わたしが爲には眞實の兄様か。(ト大藏こなしあつて)

大藏 「植ゑて見よ、花は折りたし、梢は高し、何とて松はつれなかるらん。」親はなけれど、ア、子は育つぢやなア。

小女 ほんに、さういふ事とは露知らず、眞實の兄様あるとは知らずに、徒らに暮らしました。

大藏 広い世界に同胞といふは、そなたとおれ。

小女 はしをり、鏡といはうか。

大藏 唐土の晋の豫讓、日本の大星と唐と日本にたんだ二人、其一人の妹。

小女 兄さん。

大藏 妹。コレ、兄の爲に室の曲輪へ賣つてやる。妹。おぢや。

ト手を取るを振り拂ひ

小女 テモ、お前は怖い坊さんぢやなア。

大藏 何とした、妹。

小女 コレ、わしやお前の妹ぢやないわいなア。

大藏 ヤ。

小女 わしや歴とした親も兄弟も達者でござんすれば、最前からお前のいはしやんす事は、一つも覺えはないわいなア。

大藏 それに最前から請け答へして名乗り合つたは。

小女 お前が欺しかけさしやんしたによつて、こつちも又お前を欺したのぢやわいなア。

大藏 エ、忌々しい。同胞というたも、小見目のよいわれを引ツかけて……幸ひあたりに人もなし。是れからすぐに室の曲輪へ連れていて金にする。サア、うせい。

小女 誠相な。否ぢやわいなア。

大藏 否でも應でも引き摺つて行くのぢや。

ト無理に引き立てる。所へ平次兵衛出て、大藏を引き退け

平次 娘、わりやいつの間にもこゝへ来た。

小女 オ、と、さん、よう来て下さんしたなア。

大藏 ヤア、老いぼれめ。そんなら其女子は

平次 お辰というておねがは娘ぢや。わりやなんとする。

大藏 ヤア、わりや近藤平次兵衛ぢやな。

平次 さういふそちは、印南内膳が弟大藏、其形は。エ、聞えた、前からの悪根性ゆゑ。

大藏 オ、兄の勘當受けて流浪してゐる大藏、見目のよい其女子、われが娘なら幸ひ、おれが貰うて金にする。(ト悪るを平次兵衛「何を」と立廻り、杖にてくらはし)

平次 年寄つても近藤平次兵衛。われが手にはちつとあひにくい。大藏、出直して來をらう。

大藏 エ、忌々しい。いろいろの奴が出て邪魔しをる。

平次 何ぢや。何ぞいふ事があるか。

大藏 イ、ヤ、何にもいふ事はなんまいだア。

ト唄になり、橋懸りへ逃げて入る。あと兩人こなしあり。

小女 と、様。お前よう来て下さんしたなア。

平次 イヤ、合點の行かぬは浪。向うの村端で別れて、平吉を待たして煙草入れに尋ねに來たのに、ちやんと先きへこゝへ来て、今の仕儀、

小女 サア、わしやお前に附いて来て、そこではぐれて、つい先きへ來たわいなア。

平次 テモ、早い足ぢや。さうして孫の平吉は、

小女 アイ、今の所に待して置きましたわいなア。

平次 ハテ、益處もない。大事の孫を一人ほつて置いてよいものか。

ト行かうとする。小女郎一寸留めて

小女 ア、と、さん。わしやお前に、ちつと相談せねばならぬ事がござんすわいなア。

平次 娘、いろいろの事をいふわいなア。

小女 サア、と、様、わしやお前の人平作さんと、縁が切りたうござんすわいなア。

平次 ヤ、何といふ。

小女 サア、夫婦の縁切つて、別れたうござんすわいなア。

平次 ヤア〜。娘、そりや、マア〜、何をいふのぢや。

小女 合せ物は離れ物とやら。どうぞ平作殿とは縁切つて、別れさして、どうぞ下さんせいなア。

ト平次兵衛氣色して

平次 ヤイ、娘、あの平作はおれが世に在る時、言ひ號けをして置いた古佐壁主水。おのれが戀ひに焦れて、どうぞ腰元、はしたになりともなつて、主水が屋敷へ行きたいと、毎日々々おれに訴訟。今女夫になつて夫婦仲も睦まじく、ほんに、今の今まで喜んでゐたわれがさういふは。

小女 サア、わたしも言ひ號けといひ、今添うてゐる嬉しさは山々なれど、どういふ事やら、俄かに別れたうて〜ならぬやうになるは、是れのまで縁でござりませう。

平次 イ、ヤ、ならぬ。たとへわれが否にならうがどうせうが、浪人しても平次兵衛。一旦結んだ縁、離縁さしては、聲の侍ひがどうも立たぬ。一ほんに常から貞女兩夫に見えずと、女庭訓も讀んだわれが、マア、どうして其やうな心に、なつたぞいやい〜。(ト振り廻す。)

小女 サア〜、日頃の堅いお前の氣質、さう言はしやんすは尤もぢやけれども、平作殿とは別れたいわいなア。

平次 まだ〜ぬかすか。エ、おのれ、今更飽いた、別れたいとは、エ、聞こえた。こりやおの

れ、外で不義ひろいだな。

小女 何の、さら〜さういふ事ではござんせぬ。

平次 それに聲の平作に別れたいとは。

小女 サア、それは、

平次 いたづらひろいだか。魔王め。畜生めが。エ、おのれは〜、平次兵衛が娘のやうにもない。

トさんぐくに打擲して

エ、こゝに刃物があれば、ぶち切つてくれたいなア。

ト思ひ入れある。所へ橋懸りより伴蔵、家來つれ出て

伴蔵 ソリヤ。

家來 やらぬぞ。

平次 ヤア、これは、

伴蔵 うぬは近藤平次兵衛。陸次郎が伴國松を、お辰が伴というて養育する事、駕の者が知らせに依つてうぬを尋ねた。サア、國松を渡せ。

平次 イ、ヤ、知らぬ。

伴藏 知らぬとはのおと奴。ソリヤ。

ト是より平次兵衛、小女郎、家來を相手に立廻りあつて、小女郎先きへ家來を追うて入る。あとに伴藏と平次兵衛宜しく立廻りあつて、伴藏を追うて入る。ト是れより内にて「アリヤ」と聲する。お辰平吉を連れて走り出て

お辰 と、さんいなア。どこへ行かした。怪我さしやんせねばよいが。

トうろく尋ねると、此前より三藏、大八出て

二人 女め。其小倅を。(ト懸る。お辰よろしく立廻りあつて二人をあてる。)

お辰 と、さんよりは大事の此。(ト平吉を負うて) さうぢや。

ト向うへ走り入る。三藏大八起き上がつて

三藏 今の女め。

大八 大方、此道。來い。

(ト追ひ駆け入る。始終はた、臍病口より脇藏狐出て)

脇藏 か、様いなア。(トうろく尋ね、泣きく花道へ入る。大藏出て)

大藏 伴藏がいうた陸次郎が倅、國松は平次兵衛が

トさすがを出し終刃を合はす。ト橋懸りよりはた、アウとこなしあつて、大藏小陸へかくれる。

ト伴藏、小女郎狐ト切り結び出る。甲斐々々しき立廻りあつて止る。ト大藏、小女郎狐を右のさすがにて突く。

伴藏 ヤア、大藏様。

大藏 こりや伴藏 此女子はおれが請に取つた。そちは小倅を。

伴藏 成る程。拙者は國松を。(ト向ふへ走り入る。ト小女郎こなしあつて)

小女 こりやわしを殺すのかいなう。

大藏 オ、殺すのぢや。最前の意地ばらし、愚僧が引導。こまごと言はずと、くたばつてしまへ。

トいろく苦しみながら

小女 エ、コレ、今死ぬるといふ事知つたなら、最前時壽に。ア、可愛や。あとて母を尋ねるであらう。別れた夫にも大切な。エ、死にともないくわいなう。

大藏 死にとむなうても、かうなつたら叶はぬわいやい。

小女 エ、恨めしい大藏。そちや胴慾な者ぢやなア。

大 によまひごとぬかさずと、くたばつてしまへ。

平次 娘やい。平吉やアいく。

ト引き起し、止め刺す。橋懸りばたくする。ト大藏ちやつと小座へかくれる。

トいひく尋れて出て、死骸に腰き

エ、滅相な。誰れぢや、路なかに。(トこなし有つて) ヤア、こりや娘お辰ぢや。どうして殺された。可愛やく。

ト取り附き、泣く。大藏そろく出て、さすがを逆手に持つて、うぬしと平次兵衛を突き懸る。平次兵衛

かい潜つて、手首を取り

さては、うぬ。

ト取り附くを、大藏振り放す。平次兵衛一寸尻からげ、「うぬ」ときつと見得にてよろしく

幕

四つ目

平作 住居の場
尾上 鐘樓の場

登場人物 平作ノ子、平吉。與九郎ノ子、福壽。隣の娘、おとみ。茶番唄、おぶん。

同じく、おせん。同じく、おこう。郡代伴藏。道閑坊法印。實は 印南大藏。傾城尾上。平作女房、お辰。平次兵衛。久住新平。平作實は與九郎狐。捕人、大勢。

遣り物、平舞臺、見附け赤壁納戸口、一間の押入れ。西の方、折り廻し障子屋體。いつもの所に門口。

橋懸り塗垂れ。舞臺に亂菊模様の衝立あり。幕の内より舞おぶん、おこう、おせん、娘の形。おとみ近

所の娘形、皆々綿仕事してゐる。右端明にて幕明く。

ふん 何と皆さん、昨日からこゝな平次殿、娘御のお辰さんを連れて、須磨寺へ参らしやんしたが、き

つう暇ひまがあるなア。

お富 サア、それわわたしもお辰様に頼まれて、留守に来てゐるが、平次様やお辰様が此やうに暇のいるのは、大方また、あの平吉様の道草で遅いのでござんせう。

こゝ さうぢやわいな。時に、こゝな平次様は、まへどは侍ひぢやあつたげな。それで百姓に似合はぬお堅いお人。また、聲の平次殿も随分氣立てのよい、さうして在所に似合はぬよい男ぢやわいなア。

お富 サア、それで娘御のお辰さんの戀ひ聲。元が言ひ號なごけてあつたといなア。

せん それで今いま女夫おとこになつても、互ひに精出して夫婦仲がよいといひ、平次殿には孝行にはあり、娘御

のお辰様は仕合せぢやわいなア。

ぶん ア、おいらもどうぞ平作様のやうな男を持つやうに、お辰様に肖^{おや}りたいわいなア。
こう イヤモ、誰れも其氣ぢや。肖^{おや}りたいわいなア。

ト皆々わちやくちや話しするところへ、女房お辰、菅笠を持ちて、平吉が手を引き、向うより出て来て、
内へ入り

お辰 皆様、さぞ待ちかねてござんせう。やうく今戻りましたわいなア。

ぶん オ、お辰様、よう戻らしやんした。待ちかねてゐたわいなア。

こう 嚙草臥れてあらう。坊^{ぼん}もしんどかつたであらうなう。

お富 さうしてきつう暇^{ひま}かいつたによつて、案じてゐましたが、何で遅う戻らしやんしたぞいなア。

お辰 サイナア。参りには此子が道草で拂^{はら}がゆかぬのに、それになア、戻りには、大きな喧嘩があつて
逃げるやら、追ふやら。わたしや此子を大事と、同じやうにめつた無性に逃げて戻つたが（トあ
たりを見て）さうしてアノ、と、様は先きへ戻つてゐやしやんすかえ。

ぶん イエく、平次様はまだ戻らしやんせぬわいなア。

こう お前の話しの騒動では、大方、平次様ははぐれさしやんしたのであらうぞいなア。

お辰 サア、ゆうべの騒動で、と、様にはぐれたわいなア。

お富 そりや怖い事であつたなア。

皆々 マア、怪我がなうて、うござんした。

お富 平次様も追ッ附け戻つてあらう。案じぬがようござんすわいなア。

お辰 イエく、此やうにと、さんの戻りの遅いは、定めて、わたしや此平吉を、うろく^{うろく}と尋ねてゐ
やしやんすのでござんせう。ア、どうぞ先きへ戻つた様子が、知らして進ぜたうござんすわい
なア。

ト案じるこなし。

こう そりやお前の案じさしやんすは尤も。年寄りの事、嚙尋ねてゐやしやんすであらう。オ、幸ひ、

コレ、おせん、わが身は垂氷^{たらい}の宿へ往^いにがけ、平次様を尋ねて上げましやいの。

せん アイく。わしが尋ねませうわいなア。

お辰 それは忝^{かたじけなく}うござんす。そんならおせん様、どうぞ頼みますぞえ。

せん アイく。合點^{あてん}でござんす。

ぶん おせんをやつたら、氣遣ひはござんせぬ。大方、平次様に逢ふてござんせうぞいなア。

お辰 どうぞ逢うてなら、わたしも落附きませうわいなア。

ト皆々しかくあると、橋懸りの内にて、犬の鳴く聲する。福壽狐逃げて出て

福壽 怖いわいのく。(トうろくして内へ走り込む) ヤア、か、様がいなう。

トお辰に取り附く。皆々恟りする。

お辰 ア、滅相な。此子わいの。わしを、恟りさしたわいの。

ト振り放す。福壽、お辰を見て

福壽 ヤア、か、様ぢやない。おれがか、さん、去なうく。

ト三度駆け廻つて、下にぬて泣く。

お辰 此子とした事が、思ひ掛けもない處へ来て、ヤア、か、様くと泣くは、エ、聞えた。さては

此子は逃ひ子ぢやわいなア、皆様。

ぶん さうぢやわいなア。迷ひ子ぢやわいなア。

お富 見ればいぢらしい事でござんす。どうぞ處を尋ねて、教へてやつたがよいわいなア。

お辰 ほんにマア、さうしてやらうわいなア。(ト側へ行て) コレく、坊ん、わが身は迷ひ子ぢやさう
なが、

ぶん さうしてどこからどこへ行くのぢや。

福壽 イ、ヤ、おりや知らぬ。と、様を呼びに、か、さまと連れ立つて行く道で、か、様にはぐれたわ
いの。

お辰 オ、そりや道理ぢや。悲しかろ。コレ、泣いてゐては譯が知れぬ。所はどこぢやぞ。言やつた
ら、連れさしてやるわいの。

福壽 處は知らぬ。おりや犬が怖いわいなう。

お富 コレ、坊。お前の處は何處ぢやぞいの。

ぶん コレく、ちやつと處を言やいなう。

福壽 おりや、ひもじいわいなう。

お辰 何ぢや。おりやひもじい。ホ、ホ、ホ。子供といふ者は、正直な。オ、ひもじけりや、飯も食は
さうが、マア處を言やいなう。

ぶん コレく、お辰さん、そのやうに尋ねたとて、夢中な迷ひ子。どうぞちやつとの間、こゝに置い
てやつたら、定めて親御が尋ねて見えやうぞいなア。

こゝ さうぢやわいなア。何も後生ぢや。ちつとの間、こゝに置いてやつたがよいわいなア。

お富 お辰さん、どうぞさうしてやらしやんせいなア。

お辰 そんなら、お前の言はしやんす通り、飯も食はして、留めて置いてやらうわいなア。

平吉 か、さん、あの子とおりや遊びたいわいなア。

お辰 オ、こりやよいお友達が出来たわいなア。

彌壽 コレ、をば様、おりや小豆の飯を食はして下されや。

お辰 アレ、見やしやんせ。もう馴染んで好み事ぢやわいなア。

こゝ どうでも子供は正直な。お前、世話ながら、あの子の言ふ通りにしてやらしやんせいなア。

おん ほんにわたしらも留守を渡して、もう去なうわいなア。

お富 お辰さんも草臥れさんせう。ちつと休んだがよいわいなア。

お辰 アイ、お前方、いかにお世話でござんした。見やしやんせ、折角留守を頼みながら、昨夜の

騒動で、土産さへよう買ってこなんだわいなア。

おん 何のいなア、また晩に茶飲みにくるわいなア。

こゝ 追ッ附け平次さんも戻つて、あらう。待つてるやしやんせい。

お辰 アイ、そんなら去なしやんすかえ。

おん アイ、サア、ござんせ。

トしが、くあつて、おぶん、お富、おこゝ橋懸りへ入る。

彌壽 をば様、早う小豆の飯を食はして下されい。

お辰 サア、これから此坊んと一しよに飯拵へて食べさしませう。サア、おぢや。

ト唄になり、お辰二人の子供を連れ奥へ入る。平作百姓の形、鍬かたけ、傾城尾上を連れ、向うより出

て

平作 滅相な。おれが言ひ附けて置くのに、どうして出歩くのぢや。

尾上 サイナア。常からお前の志し、何かと世話して下さんす、それで随分わたしも

平作 それに出歩くといふ事があるものか。殊に、女房も、親仁様も、須磨寺へ参つた留守。すりや猶

以ての事。コレ、お前は大事の身の上ぢやないか。それにきよろ／＼と晝中に、そのやうに出歩

いてよいものかいなう。

トいひ、本陣臺へくる。尾上もしが、くあつて内へ入る。奥よりお辰、平吉を連れ出て

お辰 こちの人、今畑から戻りしやんしたか。

平作 オ、女房共、わが身も下向しやつたか。

お辰 アイ、もそつと先きに戻りました。

尾上 姉様、坊も戻らしやんしたか。

お辰 オ、妹、わしや奥を尋ねて、わが身がるやらぬゆゑ、はつと思つたが、留守の間に、滅相な、どこへ行きやつたぞいなう。

平作 サア、それでおれが今叱つてゐるのぢや。

尾上 サイナア、お前や、平作様が常々出歩くな、内にゐても端近う出るなど、言ひ付けは守つてゐるけれど、

お辰 けれどなら、主の心遣ひ、どこへも行きやらぬがよいわいなう。

尾上 アイ、さうぢやけれど、お前方の留守を幸ひに、今日は殿様の連夜ぢやによつて、せめてはと思ふゆる。

平作 ヤ。

尾上 それで濱の阿彌陀様へ参つたのぢやわいなア。(ト一寸泣き) もうく、これから出歩きませぬ程に堪忍して下さいいなア。

お辰 コレ、申し、こちの人、妹があやうにいふ程に、もう堪忍してやつて下さんせいなア。

平作 何の堪忍するの、せぬのといふ事ではない。此やうにいふも、有りやうは大事に思ふから。

トこなしあつて表の戸を鎖し平吉を上座に直し、其次ぎに尾上を直し、ずつと下つて

若君様、お痛はしや。誰れござらう此國の御城主、桃の井修理大夫様の御子息陸次郎様、此尾上殿とお二人の中の若君。お家の騒動よりわが子にして、坊主よくと申すも、憚りながら、今暫く。追ッ附け寶の詮議仕出させう。其時には、かねて願ひの通り

尾上 サイナア、二世までもと言ひかはした若殿陸次郎様、不慮の御最期。わたしも共々にと思ひしが、此お子があるゆゑに、つらい月日を送りますも、せめては此お子が御世に出て、御出世あつたら、わたしはかねての願ひ、尼法師となり、殿様の跡を吊ふが、かねての願ひでござんすわいなア。お辰 ほんに縁といふものは味なもので、と、様は以前より同じ桃の井の家中。其折、お前の親御と父様との約束で、お前とわたしは小さい時から言ひ掛け。其うちに、と、様は聊かの事で浪人さしやんして、此大倉谷へ引き越して、今は百姓。それゆゑ、わたしとお前の縁組みもそれなり。其中、か、様の大病ゆゑ、妹を室の曲輪へ勤め奉公。程なうか、様は病死。と、様お一人、お年寄りの便りが無いとの悔み言。それでもわたしは、一旦の云ひ掛け、外へとは縁づく事もいやなり、と、様を頼んで、いつぞやお屋敷へ行たところが、御他行。幸ひ曾根の天神様でお前に逢うて、

驚しやと思ふ其日に、すぐにお家の騒動。寶の詮議の便りにもと、此大倉谷へ連れ立つて戻つて、
すぐに祝言して、今女夫になつてゐる嬉しさ。

尾上 それにわたしが勤めの内に、云ひ替した殿様はお前のお主。

平作 サア、かう寄り合つたはお主なり、女房の妹、重縁といひ、もし若君の御出世、お家も治まらば
是れも昔語り。

尾上 其時は此お子は國の守。

お辰 御家老はこちの人、元の古佐壁主水様。

尾上 お前は奥様。

平作 わが身はまた

尾上 浮世を捨て、尼とやら。(ト三人顔見合せ、こなし。)

お辰 ほんにお前、其心根が。(ト少し泣く。)

平吉 か、様、眠むたいわいなう。

お辰 オ、道理々々。昨夜からの草臥れ、眠むたからう。ドレ〜。(ト抱き上げて) 申し、こちの人、
此お子のお身の上。

平作 これにつけても寶の詮議。女房、尾上も奥へおぢや。

ト唄になり、平作、尾上、お辰入る。ト向うより道閑坊法師。破れ僧衣、乞食坊主、螺貝吹き〜出
て、すぐ本舞臺へ来て、門口の戸を開き

法印 家内御祈禱、悪魔除け、息災延命。(ト法螺貝吹く。お辰子を抱きながら、奥より出て)

お辰 ア、コレ〜。子を添へ乳してゐる。吹かすと通つて下さんせいなア。

法印 金毘羅様へ月参り、一錢二錢の志し。(ト無性に吹く。)

お辰 ア、コレ、意地のわるい。子が起きるわいなア。

法印 起きるなら、早う錢をくれたがよいわいなア。

お辰 エ、見れば、穢い破れ僧衣を着て、法螺貝吹くとは、山伏しやら、坊主やら、合點のゆかぬ人
ぢや。

法師 ハテ、僧衣を着くるが禁句でこそあれ、頭はどちらでも間に合ふ。見れば、飯盛りの内儀様、幸
ひあたりにもなし、どうぞわしにも添へ乳しておくれんかえ。(トそろ〜と寝てゐる側へ行く。)

お辰 エ、滅川な。いろ〜の事をいふ人ぢや。ちやつと通りやいなう。

法印 イヤ、通らぬ。そもじの乳が飲みたい。ひもじい〜。

ト側へ行て抱く。お辰振り放し、起き上がる。

お辰 エ、むさい形なりで、あた穢けい。慮外りがいな。出やらぬか。

法印 ハレ、乞食こじきぢやというて、味あじに變かはつた事はない。どうぞ乳ちを飲のまして。(ト抱附かかうとする。)

お辰 エ、穢けらはしい。(ト棕櫚せうじ箒はを取り)減多げんたに、寄よるなく。(ト寄よせ附つけぬ。法印ほふ顔かほを見て)

法印 ヤア〜。わりやお辰おちんぢやな。

お辰 わしが名なをいって大柄おほへな。きり〜去いねやい。

法印 ドレ、(ト又見て)矢やッ張はりお辰おちんぢや。めんような。昨夜ゆうべ慥たかに舞子まゆこの濱はまの松原まつはらで。それにここに。

(ト寄よるを)

お辰 エ、減多げんたに寄よつたら、ためにならぬぞ。(ト箒はにて寄よせ附つけぬ。法印ほふこなしあつて)

法印 テモ、めんような。慥たかにお辰おちん。其時そのとき、胸むね慾よくなというた事こと覺おぼえてゐるか。

お辰 エ、知らぬわいやい。

法印 アノ、それを知らぬか。テモ、めんような。慥たかに。(ト又寄よるを)

お辰 寄よつたら、きかぬぞ〜。

法印 お辰おちん。わりや嘸な怨うらめしからうなア。

お辰 怨うらめしい事ことはない。穢けい。早はやう去いねやい。

法印 イ、ヤ、去いなぬ。こりや迷まうてゐるな。面白おもしろい。たとへ生なきた者ものでも、死しんだ者ものでも、大事だいじない。

金輪際こんりんざい抱かいて寝ねる。お辰おちんがここにゐるからは、ここは近藤平次兵衛きんどうへいじべゐが家いへぢやな。

お辰 めんような。最前さいぜんからわしが名なや、と、様さまの本名ほんなまで

法印 知しつてゐる筈はずぢや。わりや死しんだによつて何も覺おぼえぬが、昨夜ゆうべ舞子まゆこの濱はまで逢あつた、おりや、印南いんなん

内膳うちぜんが弟あにの大藏だいざいぢやわい。

お辰 そんなら(トとつくりと見て)ほんに姿すがた變かはれど、以前いぜん心こころを懸かけた印南いんなん大藏だいざい。

大藏 オ、成なれの果はてぢや。兄貴あにがたに追放おしはなに逢あつた上うへ、此流浪このりやう。ほんぐれに落おちて、此様このさまに亂まれてゐれど

われが事はえ、忘れぬわいやい。

お辰 エ、しみしつこい。大藏だいざいなら、猶なほこちの内うちには置おかれぬ。きり〜出いをれ。

大藏 さういふ所ところはやはり常じょうの人間にんげん。見みれば、體かたに疵きずもなし。テモ、めんような。とんとおりや合點あてんが
行いかぬ。

お辰 ちやつと出いて行きやいなう。

大藏 ハテ、よう出したがる奴やつぢや。何なににもせよ、是こゝからわれを連つれて行いんで、おれが女房にようばうにする。さ

うぢや。

お辰 否ぢや〜。穢らはしい。わしや今は平作殿といふ夫があるぞ。

大藏 そりや大事ない。男ぐるみに連れて行て女房にする。見りや、向うに小俣が寝てをるが、われと平作とやらが固りか。よいわ、得心せにや、こいつを。(ト平吉を引き立てる。)

お辰 コレ、其子をどうするのぢや。(ト取らうとする。)

大藏 どうもせぬ。いやと言やア、餓鬼めを捨り殺す。

お辰 ア、コレ。其子は大事の〜、主と二人が仲の子。殺さす事はならぬ。

大藏 エ、ほてくるしい。得心せぬとたつた一締めぢや。お辰、いやか。

お辰 サア、それは。

大藏 但し否か。女房になるか。

お辰 サア、それは、

大藏 否か。

お辰 サア、

大藏 應か。

お辰 サア、

兩人 サア〜〜、

大藏 どうぢや。

ト立廻つて、子供を締め殺さうとする。奥より平作出て、平吉を引ツたくり、大藏を見事に投げる。お辰見て、喜び

お辰 オ、こちの人、よい所へ出て下さんした。あの大藏めが、あたいやらしい、わしを口説きくさつて、いやといふと、此子を

平作 こりや女房、何にも云ふな。おれがあるからは、氣遣ひな事はないわい。

大藏 アイタ、い、い、い。こりや腰骨の國替へぢや。(ト起き上り、平作を見て) ヤア、わりや古佐壁主水。すりや平作といふは。

お辰 言ひ號けの夫、今夫婦になつてゐる。何と肝が潰れるか。

大藏 イ、ヤ、肝より腰骨が潰れた。主水。わりや此大藏を手ひどい目にあはしたな。武士をどえらう投げたぞよ。

平作 何處へ武士、猿松めが。以前は印南内膳が弟大藏。今はソレ、乞食のづくにふめ。身の程知らぬう